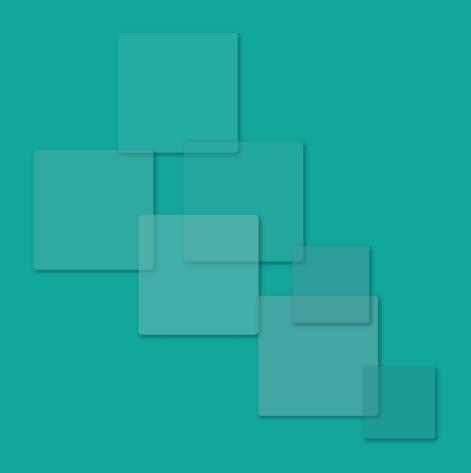
平成 27 年度

文化庁・戦略的芸術文化創造推進事業

報告書



平成 28 年 3 月 NPO 法人都市文化創造機構

目 次

1. 事業の全体概要	1
2. 多様な関係機関による芸術表現活動支援のあり方を	検討する海外調査 3
3. 多様な分野の人々の協働を促進するためのインクル	ーシブ・カフェ 5
【添付資料】	
資料 1:ドルハウス美術館 インタビュー内容	9
資料 2:アムステルダム ナイト・メーヤー インタビュ	一内容······13
資料 3:ブリティッシュ・カウンシル インタビュー内:	容······· 15
資料 4:アンリミテッド シニア・プロデューサー イン	タビュー内容19
資料 5:アンリミテッド参加アーティスト① インタビ	ュー内容31
資料 6:アンリミテッド参加アーティスト② インタビ	ュー内容33
資料 7:インクルーシブ・カフェ in 岡山····································	37
資料 8:インクルーシブ・カフェ in 浜松··············59	59

1. 事業の全体概要

<事業名>

文化庁 平成 27 年度 戦略的芸術文化創造推進事業 「障害者の芸術的表現活動による自己肯定感の高まりと多様な価値実現」推進事業

<事業期間>

2015年6月1日~2016年3月31日

<趣 旨>

本事業は、平成 26 年度に採択された「『障害者の芸術的表現活動による自己肯定感の高まりと多様な価値実現』に向けた事業」の成果を引き継ぎ、それを具体的に一歩進めて「障害者の社会的包摂の可能性」を高め、2020 年東京でのオリンピック・パラリンピックに向けて文化プログラムの充実に寄与することを目的として実施したものである。

"社会的包摂(ソーシャル・インクル―ジョン)"とは"社会的排除(ソーシャル・エクスクルージョン)"の対概念で、低所得という要因のみならず多次元的要因によって社会から排除されている人々の精神的ダメージの回復や周囲との人間関係構築がもっとも重要だとされている。そのために文化芸術の果たす役割は大きく、文化プログラムの内容は社会的包摂を具現化するような取り組みを包含することが重要だと考えられる。

このような考えのもと本事業では、多様な関係機関による芸術表現活動支援のあり方を検討する海外調査、および多様な分野の人々の協働を促進するためのインクルーシブ・カフェを実施した。障害者の芸術作品の展示促進のみならず、多様な支援を受けられることと多様な発信方法があることは、障害者にとっては選択肢が拡大することを意味する。一人ひとりに多様な選択肢が保障されていることは自己決定権が尊重されているということであり、肯定的なアイデンティティの構築につながる。こうしたことが「芸術的表現活動を通じた社会的包摂」の一つの道筋だと言えるであろう。

<全体の概要>

- 1) 多様な関係機関による芸術表現活動支援のあり方を検討する海外調査
 - ①ハールレム(オランダ):2012 年 4 月 3 日~2012 年 9 月 2 日の会期で日本の障害者の作品展を開催したドルハウス美術館(HET DOLHUYS)を訪問し、展覧会開催の経緯および成果と課題を調べるためにインタビュー調査を実施した。
 - ②アムステルダム(オランダ): 文化政策の動向を調べるためにナイト・メーヤーへのインタビュー調査を実施した。
 - ③ロンドン(英国): 2012 年ロンドン五輪の文化プログラムの主軸の一つであった「アンリミテッド Unlimited」について、障害をもつアーティストへの支援のあり方や社会的課題を解決するためのアプローチ等を調べるために関係者にインタビュー調査を実施した。

2) 多様な分野の人々の協働を促進するためのインクルーシブ・カフェの開催

岡山と浜松の2カ所で開催し、開催市の行政職員(文化政策担当者)が障害者の芸術表現活動に関心をもつ契機にするとともに、障害者福祉施設スタッフ、デザイナー・クリエイター等との新たなネットワークを構築する機会とした。また、それぞれの開催地で活動しているNPO法人の協力を得て、障害者の作品等の展示とカフェ運営も併せて行うことができた。

<成 果>

1) 海外調查

ドルハウス美術館で日本の作品展が開催されたのは、作家のバックグラウンドでなく純粋に作品の芸術的価値を判断したからであることが明らかになった。また、美術館の運営は行政だけでなく、多様なパートナーと専門家とのネットワークによって支えられているとのこと。今後、日本の障害者の作品展示に関して示唆に富む内容であった。

英国のアンリミテッドに関する調査では、"社会モデル"に基づく障害者支援の一つだということが明らかになった。つまり、障害は社会制度上の不備によってもたらされるものであり、多様な機関が多様な支援プログラムを展開することによって、障害のあるアーティストに意欲的な作品制作のチャンスを提供することができ、それぞれの能力が発揮されたのだと言える。

2) インクルーシブ・カフェ

"社会的包摂"と"芸術的表現"をテーマとし、多様な団体や企業、行政などと協働しながら事業展開を行い、社会に好循環をもたらしているゲストのお話から、異分野との協働の意義と成果、今後の展望などが示された。参加者は行政職員、福祉施設職員、クリエイター、芸術系大学学生、障害児の保護者など多様な人々が集い、意見交換を行うことができた。

ゲストの話から浮き彫りになった共通点は、芸術的表現活動がもたらす周囲の人々との関係性の変化であり、そうした変化が徐々に広がっていくことによる社会全体の変化への期待である。また、社会的包摂を具現化していくには、一人ひとりが自分事として捉えるような働きかけの必要性を再確認できたことも成果であろう。

<課 題>

1) 海外調査

ドルハウス美術館の館長は「"アール・ブリュット"などの概念の定義は難しく、そういうところにエネルギーを使いたくない」と述べており、実際の展覧会名は Verborgen schoonheid uit Japan(日本の隠された美)であった。障害者の芸術表現に関する議論を国内だけでなく海外の動向も見据えながら深めていく必要性を改めて感じた。

アンリミテッドのレガシー(遺産)を2020東京五輪に向けてどのように継承していくのか、当事者(日本の障害のあるアーティスト)を含めて議論を積み重ね、明確なビジョンと方向性を早急に示す必要があるだろう。

2) インクルーシブ・カフェ

障害者の芸術表現活動の支援を創造都市政策に位置づけることと、多様な分野の人々の協働を促進するためには、継続的な交流と議論の積み重ねが不可欠だと考えられる。また、障害者の芸術表現に関心のある人々だけでなく、無関心層にも働きかけていく努力が必要だということも確認できた。継続開催と関心の広がりに努めることが今後の課題である。

2. 多様な関係機関による芸術表現活動支援のあり方を検討する海外調査

<趣 旨>

2012年ロンドン五輪の文化プログラム「カルチュラル・オリンピアード」の主軸の一つであった Unlimited (以下、アンリミテッド) は、障害のあるアーティストによる芸術の発展に寄与することを目的として 2009年に始まった支援プログラムである。アンリミテッドから生まれた作品は高く評価され、障害のあるアーティストの活躍の場を大きく広げた。この成功を受けて、アンリミテッドはロンドン五輪閉幕後も継続することが決定し、新たなアーティストの発掘や作品の委託等の支援が行われている。

日本での2020年東京五輪の開催決定に際して、その立候補ファイルに「2012年ロンドン大会の『アンリミテッド』プロジェクトの成功を継承する」と明記されたため、文化プログラムにおいて何らかの障害者支援プログラムが展開されるものと考えられる。

そこで本事業において、アンリミテッドの関係者に対してインタビュー調査を行い、日本への応用可能性について検討することとした。

また、2012年に日本の障害者の作品展が開催されたドルハウス美術館(Het Dolhuys)を訪問し、2020年東京五輪に向けた文化プログラムでの展覧会のありようを考える一助とするためにインタビュー調査を実施した。

なお、オランダでの調査に関してはオランダ王国大使館のバス・ヴァルクス氏に、英国 での調査に関してはブリティッシュ・カウンシルの湯浅真奈美氏と国際交流基金の菅野幸 子氏にご協力いただきました。ここに改めて謝意を表します。

<訪問先・調査日・対応者> ※敬称略

①訪問先:ドルハウス美術館(オランダ・ハールレム)

調査日:2015年9月29日(火)

対応者:ハンス・ローイエン Hans Looijen (館長)

ジェシカ・ベレス Jessica Belles (プロジェクト・マネージャー)

②訪問先:ブリッジ・ホテルのラウンジ(オランダ・アムステルダム)

調査日:2015年9月29日(火)

対応者:ミーリック・ミラン Mirik Milan (夜のアムステルダム市長)

③訪問先:ブリティッシュ・カウンシル(英国・ロンドン)

調査日:2015年10月1日(木)

対応者:キャロル・マックファデン Carole McFadden (プログラム・マネージャー)

④訪問先:アーツ・アドミン会議室(英国・ロンドン)

調査日:2015年10月2日(金)

対応者:ジョー・ヴェレント Jo Verrent (アンリミテッド シニア・プロデューサー)

⑤訪問先:アーツ・アドミン会議室(英国・ロンドン)

調査日:2015年10月2日(金)

対応者:リチャード・ブッチン Richard Butchins (アンリミテッド参加アーティスト)

⑥訪問先:The Shard 内のカフェ(英国・ロンドン)

調査日:2015年10月2日(金)

対応者:シーラ・ヒル Sheila Hill (アンリミテッド参加アーティスト)

※それぞれの調査内容については添付資料を参照

3. 多様な分野の人々の協働を促進するためのインクルーシブ・カフェ

<趣 旨>

主催者の一つである NPO 法人都市文化創造機構は、創造都市ネットワーク日本 (CCNJ) に参画し、創造都市に関する調査研究・情報提供・政策支援・人材育成等を行っている。

事業の一つとして、障害者の芸術表現に関心をもつ人々のネットワークを構築すべく"インクルーシブ・カフェ"を、2013年5月から大阪市立大学都市研究プラザとの連携によって、大阪で計10回開催してきた。

文化庁事業の一環として実施したインクルーシブ・カフェは、障害者の芸術表現活動の 支援を創造都市政策に位置づけることをめざし、2014年度に5カ所(熊本・横浜・高松・ 山形・可児)、2015年度に下記のとおり2カ所で開催した。

なお、「カフェ」と名づけた理由は次のとおりである。カフェの歴史は古く、17世紀まで遡る。ウィーンのカフェやロンドンのコーヒーハウスでは、自由闊達な対話の中から時代を変える思想や学術、芸術、文化が創造されたという(参考:『CAFE:創造都市・大阪への序曲』佐々木雅幸編著、法律文化社、2006年)。そういった場になればという思いを込めて、インクルーシブ・カフェを開催するものである。

<開催概要>

①インクルーシブ・カフェ in 岡山

日 時:2015年10月10日(土)14:00~16:00

会 場:岡山県天神山文化プラザ 第3展示室 入口周辺

ゲスト:※50音順、敬称略

加藤種男(公益社団法人企業メセナ協議会代表理事専務理事)

田野智子(NPO法人ハートアートリンク代表理事)

樋口龍二(NPO法人まる代表理事、株式会社ふくしごと代表取締役副社長)

松田圭一(NPO法人灯心会スタッフ)

参加者:51人

主 催:文化庁、NPO法人都市文化創造機構

協 力:NPO 法人ハートアートリンク、大阪市立大学都市研究プラザ

②インクルーシブ・カフェ in 浜松

日 時:2015年12月3日(木)18:00~20:00

会 場:鴨江アートセンター301室

ゲスト:※50音順、敬称略

久保田翠(認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ理事長)

鈴木康友 (浜松市長)

平田オリザ(劇作家・演出家・東京藝術大学特任教授)

モデレーター:佐々木雅幸(NPO法人都市文化創造機構理事長)

参加者:70人

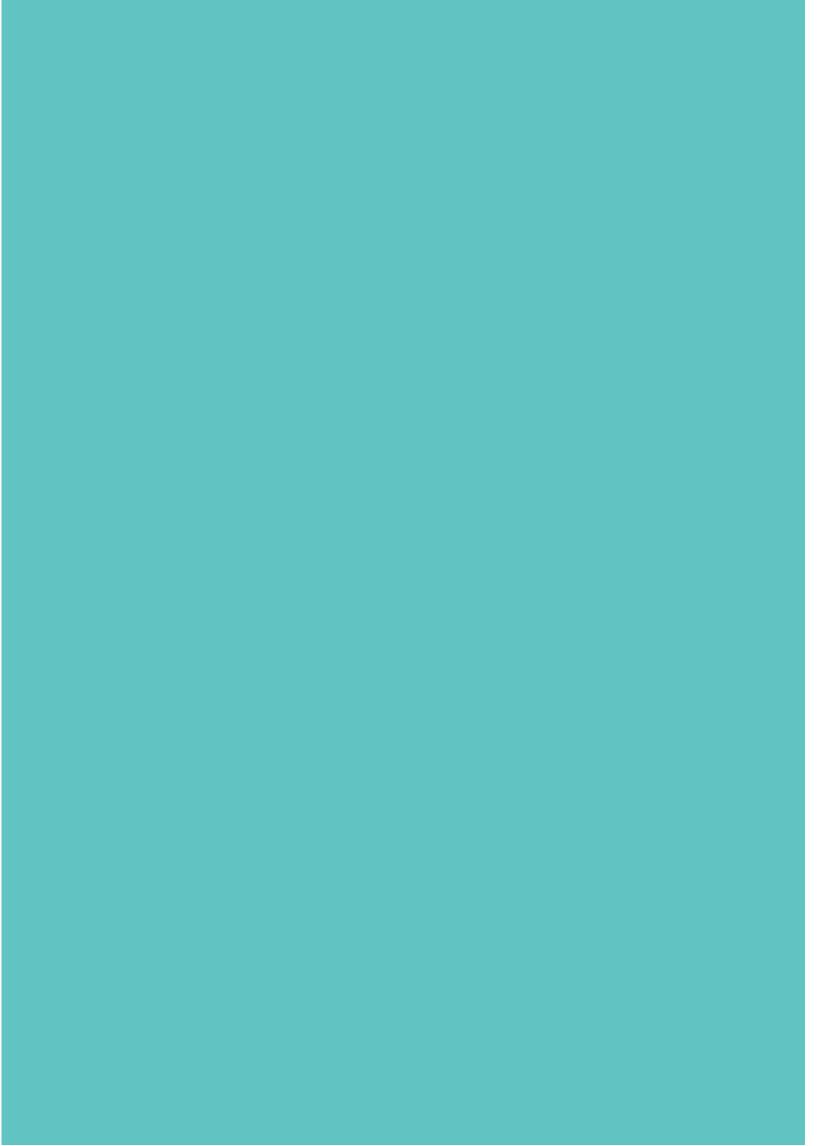
主 催:文化庁、NPO 法人都市文化創造機構

協力:浜松市、NPO法人クリエイティブサポートレッツ、

大阪市立大学都市研究プラザ

※各回の内容については添付資料を参照

資 料



■資料1:ドルハウス美術館 インタビュー内容

調査日:2015年9月29日(火)

対応者:ハンス・ローイエン Hans Looijen 氏(館長)

ジェシカ・ベレス Jessica Belles 氏 (プロジェクト・マネージャー)

▼まず、この美術館の概要を教えてください。

一美術館としてオープンしたのは 2005 年。元々は 1320 年にハンセン病やペストの患者の収容施設として開設されました。その後、16世紀に精神病患者の収容施設となりましたが、次第に精神病院の機能は縮小化されて 1998 年に閉鎖しました。精神病院で保有していた設備や患者さんのアート作品等を展示したいという人々が現れ、2002 年に財団が設立されて 2005 年に美術館として再オープンしたのです。

今年はちょうど美術館開設 10 周年になるので、その記念の展覧会を来週(10月7日)から開催します。オープニングにはオランダの文化副大臣が来られます。展覧会名は「De Maakbare Mens(制作可能な人間)」で、ゴッホやムンクなどの作品を展示するとともに、彼らの精神状態に関するトークイベントも行う予定です。彼らは 2 人とも日常生活においては少し変わった人だと思われていましたが、芸術に新しい生命を吹き込んだ改革者だともみられています。この展覧会では、障害をもっていたり精神的に異常をきたしたりしている人の中には、社会を革新できるすばらしい才能を持った人もいることを示すのがねらいです。一人ひとりの人間の内部に何があるのかを深く掘り下げていけば誰もが価値ある存在だということを、展覧会を通じて訴えていきたいのです。ちなみに、ゴッホやムンクとともに、滋賀県在住の作家・澤田真一さんの作品も展示します。

また、この 10 周年記念の展覧会ではリリアナ財団とも提携しています。リリアナ財団は 開発途上国の障害児のための活動を展開していて、子どもたちも素晴らしい芸術作品を生み 出しています。嫉妬するほど素晴らしい作品があるし、我々にインスピレーションも与えて くれます。

▼運営に関して教えてください。

一運営に係る経費は毎年 200 万ユーロが必要ですが、政府からの補助金はありません。 入館料などの事業収入の他に、21 のパートナーから財政的に援助してもらっています。パートナーというのは、ヘルスケア関係の財団や保険会社などです。ただし、特別なプロジェクトに関しては国の機関(法務省等)から助成金をいただくことがあります。

スタッフはパートを入れて現在14人、フルタイムに換算すると9人になります。そのうち6人はプロジェクト・ベースの雇用で、それぞれのプロジェクトに合った専門家を招集し

ています。他にボランティアが 110 人いて、その 40% は、精神的になんらかの問題を抱えていた人々です。美術館以外の場所で就労できるような支援も行っています。

▼ 10 周年記念誌の表紙には脳細胞のビジュアルが使われていますが、脳科学や認知科学の研究も行っているのでしょうか?

一この美術館の活動の柱は4つあって、①科学、②文化芸術、③ケア&ソサエティ、④ディベート&教育、です。展覧会を企画する場合は、まずテーマを考えて、それに関連する研究者らと話し合い、展示のコンセプトや内容を決めていきます。オランダのライデン大学やスウェーデンのカロリンスカ大学とも連携してプロジェクトを展開しています。ちなみにここの展覧会では、障害者の作品だけを対象にしているのではなく、自分たちの考えたテーマに沿うのであれば、障害をもたない作家の作品も合わせて展示しています。

▼ 2012 年に日本のアール・ブリュット・ジャポネ展の巡回展を開催したのは、なぜだったのでしょうか?

――2010年に私(ローイエン)が知り合いの画家に会うためにパリへ行ったとき、ちょうどアル・サン・ピエール美術館でジャポネ展が開催されていました。そして知人から「絶対に行った方がいい」と勧められて、「日本の作品ならきっと素晴らしいだろう」と思い、行ってみたらやはり素晴らしい作品ばかりでした。アウトサイダー・アートの作品全体に共通するような表現もありましたが、やはり日本文化による独自の表現も感じられました。それで日本のオーガナイザーに「この作品展をオランダでも開催したい」と連絡を入れたのです。しかし、時間がかかり、交渉は難航しました。

その頃、ちょうどジェシカが日本へ行く機会があったので、彼女に滋賀へ行ってもらう ことにしたのです。直接会って、この美術館のことを伝えて了承してもらい、なんとか実 現することができました。

▼ジャポネ展の成果はどのようなものでしたか?

――「大発見だ」「絶対に見に行くべきだ」と、展覧会を見た方々が口コミで広げてくださり、 多くの入場者がありましたし、すごく好評でした。入場者が感想を書くゲストブックには、 「インサイダーよりも素晴らしい作品ばかりだった」と感想を書く人が多かったです。また、 感動した方から「日本の作品を買えるように」とお金を寄附してくれた方もいます。

▼そのときの展覧会名は Verborgen schoonheid uit Japan、英語では Hidden Beauty from Japan (日本の隠された美) でした。アール・ブリュットという名称を用いなかったのは、何か意図があるのでしょうか? 日本では障害者の作品をアール・ブリュットとして位置付けることに賛否両論がありますが、どのようにお考えでしょうか?

一定義の問題は非常に難しいですね。私たちが今、話しているアートはどこかの定義にあてはまらないものもあります。ブリュットは"生"という意味があり、ピュアなものだということですが、既存の定義にあてはまらないからこそ"ブリュット"だとも言えるのではないでしょうか。デュビュッフェが提唱したアール・ブリュットは、英語圏ではアウトサイダー・アートとなり、これは差別用語だという議論もありますね。他にもロウ・アートやセルフトート・アートなど様々な定義があって、完全に定義づけることはできないでしょう。

オランダという国名はオランダ語で Nederland (ネーデルランド)、「低い土地の国」という意味があって、16世紀まで独立した国ではなかったためにこのような名称になったと考えられています。なんとなく差別的なニュアンスはありますが、これを変えようとしても無理なのと同じで、そういうところにエネルギーを注ぐのではなく、もっと他のことにエネルギーを使いたいですし、私(ローイエン)自身は定義にはこだわっていないつもりです。

- ▼日本の障害をもった作家の作品が高く評価されたとのことですが、再びオランダで展覧会を行うような、さらなる可能性を広げるには何が必要だと思われますか?
- ――2012年に展覧会を開催したので、その後の変化を知るようなことが紹介できればいいでしょう。たとえば、新しい作家を発掘したり、同じ作家でも作風の変化などを見せることができれば、より多くの人が注目するでしょう。

私たちが展覧会をする場合は、他の美術館のキュレーターと一緒に福祉施設へ行って、 作品の客観的評価をしてもらっています。どんな絵でもいいというわけではなく、やはり 展覧会を行うためには作品の選定作業は不可欠です。もう一つの方法として、公募展のよ うな形式で作品を募集するのも、新たな才能を発掘する方法として有効かもしれません。

- ▼日本では様々なコンセプトに基づいた公募展が行われています。たとえば大阪府では現 代アートとして位置づけて公募展を毎年実施していて、最終目標としては障害のある作家 が経済的に自立していけるようなシステムを構築することです。
- ――とても素晴らしい取り組みですね。オランダでは、まだそのような取り組みはありません。ずいぶん前になりますが、オランダのある美術館の館長が「アウトサイダー・アートは芸術ではない。作家としての成長もみられない」と発言したことがあります。その影響からか、オランダのキュレーターの多くは、「(障害者の作品に関して)選定には自信がない」という人が多いです。
- ▼日本の状況も同じようなものです。先の定義の問題とも絡んできますね。ところで、この美術館にはコレクションは何点ぐらいあるのでしょうか?

――いわゆるアール・ブリュット、アウトサイダー・アートと呼ばれる作品は約 240 点で、その中には滋賀県在住の作家・澤田真一さんの作品もあります。その中の約 200 点は、元々は近代美術館に収蔵されていたものでしたが、当時の近代美術館館長が「うちでは展示する機会がないから」と寄贈してくれました。個人からの寄贈作品もあります。

▼コレクションする作品は館長のローイエン氏が選ぶのでしょうか? —最終的には館長の判断ですが、ここの美術館にキュレーターはいないので、他の館の キュレーターに外部アドバイザーのような形で協力してもらっています。

▼ありがとうございました。

※ドルハウス美術館ホームページ

http://www.hetdolhuys.nl/

■資料2:アムステルダム ナイト・メーヤー インタビュー内容

調査日:2015年9月29日(火)

対応者:ミーリック・ミラン Mirik Milan 氏

(夜のアムステルダム市長 Night Mayor Amsterdam)

▼ナイト・メーヤー(夜の市長)は、どのようにして選ばれるのですか?

― オランダは約 400 の自治体があって、それぞれの市長は選挙で選ばれるのではなく、 政党から推薦されて国王の任命によって就任します。でも、ナイト・メーヤーは選挙で選 ばれるので、自分はオランダでたった一人、直接選挙によって選ばれた市長です(笑)。

選挙の手順をもう少し説明しますと、全部で3段階あって、①クラブやバーの利用者約 $4 \sim 6$ 万人のオンラインでの投票、②大きな会場(ホールなど)での候補者による 15 分間のスピーチ、審査員5 人による審査を行い、それぞれの段階で50% 以上の得票のあった人がナイト・メーヤーとなります。

▼この制度はいつできたのですか?

一制度は 2003 年にできました。ちょうどその頃、ポール・ダンスが流行していたんですが、市は飾り窓の地区でしか認めないと、規制しようとしたんです。私たちにとってポール・ダンスはエンターテインメントであり、パフォーミング・アーツでもあると考えたので、抗議する意味も込めて市内のクラブで一斉にポール・ダンスを行いました。そうやって多くの店で行うと警察は摘発することもできませんし、規制する基準が曖昧では混乱をきたすだけだということが明らかになりました。それで、夜の街で何が起こっていて市民は何を考えているのかを、政治家たちに伝えるスポークスマンのような存在が必要だと、夜の店を営業している事業主たちが声を挙げて、ナイト・メーヤーという制度ができたんです。ですから私は、昼の市長に助言することもあります。

▼ナイト・メーヤーに任期はあるのですか?

――任期は2年間で、私は2012年に5代目として就任し、現在は2期目です。3期以上は認められないので、今年度が最後になります。

▼ナイト・メーヤーの仕事はどのようなものですか?

――広い意味でアムステルダムのナイト・ライフを促進すること、様々な立場の人々をつないで意見を聴いて取りまとめ、政策につなげていくことが職務です。近年はシティ・マーケティングの中で「ナイト・ライフ」を商品として捉えることが重要になってきています

ね。「ナイト・ライフ」というと健全な生活とはかけ離れているような、ネガティブなイメージで捉えられることが多かったと思うのですが、私自身は「ナイト・カルチャー」と同義語だと考えていて、ポジティブなイメージに変えたい。ナイト・ライフが充実することによって、経済的・社会的・文化的に発展するのだということを示したい。たとえば、クリエイターなど芸術的才能や創造性の豊かな人々は、自分の才能を伸ばすためにナイト・ライフが必要だと考えているので、そういう人々をアムステルダム市に惹きつけるにはナイト・ライフの充実が不可欠です。

▼今のアムステルダム市におけるナイト・ライフはどのようなものですか?

――規制が厳しく、わりと早めに閉店する店が多いんです。日本のように明け方まで営業している店はありません。ですから、夜の営業時間を延長できるように、さらに 24 時間営業も可能になるよう、多様な人々と対話を続けて規制を緩和するように働きかけています。

モダンなナイト・クラブは、夜に音楽や食事を楽しむだけでなく、昼間にはカフェやヨガのワークショップを実施したり、ギャラリーなどの文化施設としての機能も併設しています。そういう多機能なスペースにして、地域の人々が多様に利用できれば活性化していくでしょう。

それから、市内には空き店舗や空きオフィスが増加してきているので、そうしたスペースを安価な費用で利用できるインキュベート施設として整備して、若い人々が起業できるような、チャレンジできる環境を整えていくことが将来的にはアムステルダム市の活性化につながっていくと考えています。

その先行事例としては旧東ドイツのベルリンがあり、「Be Berlin」をスローガンにして都市再生を推進しています。たしかベルリンは、ユネスコの創造都市ネットワークにデザイン分野で加盟していて、創造産業の振興にも取り組んでいますね。

私は今、アムステルダム市にインキュベート施設が整備されれば、若いクリエイターたちが集まってくるので、ナイト・ライフを充実させることも重要であることを理解してもらうように働きかけています。

▼ありがとうございました。

■資料 3: ブリティッシュ・カウンシル インタビュー内容

調査日:2015年10月1日(木)

対応者:キャロル・マックファデン Carole McFadden 氏(プログラム・マネージャー

Programme Manager for Middle East and North Africa, East Asia, China

Theatre and Dance | Arts Group)

▼ブリティッシュ・カウンシルがアンリミテッドに関わるようになった経緯はどのような ものだったのでしょうか。

――2009年に遡りますが、その年から様々な関係機関による文化プログラムに関する話し合いが始まりました。スポーツ選手だけでなく、カルチュラル・オリンピアードを展開することによって、文化や芸術の分野でも海外から多様な人々を招くことになります。一生に一度の機会ではなく、カルチュラル・オリンピアードの成果が長期的にレガシーとして継承され、アーティストが国際的に活躍できる機会をサポートしようと、ブリティッシュ・カウンシルも関わることになったんです。私たちのミッションは国際文化交流なので、アンリミテッドを国際的に展開する部分に関して、重点的にサポートしています。国際的なプレゼンテーションなど、様々な関わり方があります。私はブリティッシュ・カウンシルの代表として、2012年のアンリミテッド・プロジェクトを担当していました。

当初、アンリミテッドを支援していた機関は、ロンドン・オリンピック・パラリンピック組織委員会(LOCOG)、アーツ・カウンシル・イングランド、クリエイティブ・スコットランド、アーツ・カウンシル・オブ・ノーザン・アイルランド、アーツ・カウンシル・オブ・ウェールズ、ブリティッシュ・カウンシルで、これらがアンリミテッドのためのお金を拠出しました。

▼なぜ、アンリミテッドのようなプログラムが構想されたのでしょうか?

――英国は障害者とアートに関して、非常に長い歴史をもっています。1970年代頃から障害をもったアーティストが活動するようになり、その当時若かったアーティストは、今ももちろん作品を作っていますが、一方で政治的に発言できるようにもなっています。それで2012年ロンドン五輪に向けた文化プログラムで、障害をもったアーティストが活躍できるプログラムが構想されたのだと思います。

それまで障害者の芸術は、どちらかというと小規模なものでした。アンリミテッドでは何をしたかというと、障害者・聴覚障害者にチャンスを与えること。具体的には申請書を書いて提出してもらい、選考して補助金を出して、新しい作品をつくってもらう。リスクをとって新しい大きなことにチャレンジする機会を提供したのです。

このスキームによって、29の新しい作品を英国の障害をもったアーティストが制作しました。作品制作を委嘱されたアーティストは、私たちがすでに知っていた人もいましたが、まったく初めて出会った人もいました。完成した作品は、カルチュラル・オリンピアードの一環としてロンドン・フェスティバルで披露されただけでなく、サウスバンク・センターでも披露されました。

▼関係機関の役割分担はどのようなものですか?

――アーツカウンシルは直接、アーティストに作品制作のための補助金を出す、ブリティッシュ・カウンシルはアーティストだけではなく、出来上がった作品を海外へもっていくときにも費用を助成するという役割分担になっています。ブリティッシュ・カウンシルは約110カ国にオフィスをもっているので、ブラジル・ドイツ・日本など5つのインターナショナル・コラボレーションに対して助成しました。

私たちの貢献方法というのは、オリンピック自体が世界中から様々な国の選手が集まってくるものなので、その精神と同様に様々な国のアーティストと英国のアーティストが連携して作品制作することを重視しています。このように、英国以外からアーティストを招聘したり、あるいは英国で生まれた作品を海外で紹介することを、私たちはいつも促進していて、様々な国の人々とつながる機会をつくっています。

▼アンリミテッドの成果はどのようなものでしょうか。

一アンリミテッドとして補助金が出ることによって、今まで注目されなかったアーティストに発表の機会が与えられたことでしょう。また、障害のあるアーティストの作品は質が高いということをきちんと広めて、多くの人に認めてもらえたと考えています。劇場のプロデューサーなどの企画者は、つねに新しいものを探しているので、障害者の作品に触れることができたことも、双方にとって良いことだと思います。今後につながっていきますから。

英国内だけでなく海外でも成果は表れていて、たとえばブラジルでは定期的にアンリミテッドのプログラムが開催されています。その開催までに、ワークショップやコンサルテーションを実施し、飛行機やホテルなどアクセスに関する調査も実施しました。障害をもったアーティストにとってアクセスの問題は非常に重要です。

また、カタールのドーハで実施したこともあります。カタールと英国は友好関係があるからで、そこには東南アジアからも代表者がきて、アンリミテッドに非常に興味をもっていました。

もう一つ、英国の劇団グレイアイ・シアター・カンパニーが東南アジアの若いアーティストと協力して、同じようなカンパニーを設立できるように研修を行いました。この劇団の芸術監督であるジェニー・シーレイは、パラリンピックの開会式で共同ディレクターを

務めるなど活躍しています。

▼サウスバンク・センターでもアンリミテッド・フェスティバルが開催されていますね。

――サウスバンク・センターは英国では重要な文化施設の一つです。いわばメイン・ストリームの拠点の一つなので、ここでアンリミテッドの作品が披露されることは大きな意義があります。アンリミテッドによって海外へ行ったアーティストを招いて、それぞれの経験を語ってもらうトークイベントも行いましたし、有料のものや無料のものも組み合わせて多彩に展開され、より多くの人に知ってもらう機会になりました。

パフォーミング・アーツに関しては、作品を鑑賞するとアーティストが障害をもっていることはすぐわかりますが、詩や文学をつくる人が障害を持っていても、作品を鑑賞しただけでは作者が障害者だとはわかりません。だから、今まであまり注目されなかったアーティストが、こういったプログラムで作品のすばらしさが注目されたことは非常によい機会だと思っています。

また、私たちブリティッシュ・カウンシルが働きかけて、サウスバンクでのフェスティバルには海外から 96 人の代表者がやってきました。

サウスバンク・センター自体にも変化があります。この施設は 1953 年に建てられ、当時は障害者のアクセスにはあまり関心が向けられていなかったのですが、アンリミテッド・プログラムを実施することによって建物全体のアクセスが見直され、アクセス・マップも作成されて来場者に配布されるようになりました。こうした変化は他の施設にも波及し、たとえばテート・ギャラリーもアクセスが改善されるようになりました。

▼今後もアンリミテッドは継続されるのでしょうか?

――アーツカウンシルがさらに補助金を出すことを決めましたし、ブリティッシュ・カウンシルは障害者の芸術にどんどんフォーカスするようになり、シンガポールや南アフリカ、カナダでも展開することになっています。

私たちが成し遂げたい希望は、障害をもっていても非常に質の高い作品をつくることができると、より多くの方々に認知してもらうことであり、そのようなイベントを展開することです。たとえば、エジンバラでもショーケースを実施して、新進アーティストの作品を紹介しました。30作品のうち5作品はアンリミテッドから生まれた作品です。このショーケースには海外から約200人の代表者が参加し、鑑賞しました。将来的には「障害者がつくった」というラベリングをしなくてもいいようになることをめざしています。

さらに時間はかかるでしょうが、デザインや建築などの分野でも障害者が活躍するようになり、クリエイティブ・エコノミーに貢献するような変化が生まれることを期待しています。

- ▼質の高い作品をつくるために、どのような工夫をされていましたか?
- ――委嘱作品を決めるためのパネルの構成が非常に重要ですね。公正な評価ができるように、様々な立場の人が入っていました。最初の方でお話しした関係機関(4 つのアーツカウンシル、ブリティッシュ・カウンシル等)と障害当事者も入っています。

カルチュラル・オリンピアードのディレクターだったルース・マッケンジーが、アンリミテッドのチェアも務めました。彼女は実務経験も豊富なので、的確な判断・評価ができると信頼されていたからです。

▼ありがとうございました。

■資料4:アンリミテッド シニア・プロデューサー インタビュー内容

調査日:2015年10月2日(金)

対応者:ジョー・ヴェレント Jo Verrent 氏

(アンリミテッド シニア・プロデューサー Senior Producer, Unlimited)

▼アンリミテッドが始まった経緯について教えてください。

――2012 年ロンドン五輪のカルチュラル・オリンピアードの一部として始まりました。 最初の時点では LOCOG(the London Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games)が障害アーティストの支援プログラムを組み込もうと、計画していました。 アンリミテッド・プログラムには委員会が設けられていて、私は最初その委員の一人で、 2009 年から障害アーティストから申請された作品のうち、助成対象になるものをみんなで審査していました。

アンリミテッドは当初、2012年で終わる予定でしたが、とても成功したことと、「仕事は始まったばかりだ」という認識をみんなが共有していたので、アーツ・カウンシル・イングランドが150万ポンドを追加で拠出することが決まり、契約を結んで、障害アーティストが申請書を提出するという仕組みが出来上がりました。

現在、アンリミテッド・プログラムの運営を委託されているのは、シェイプ Shape とアーツアドミン Artsadmin という 2 つの組織です。シェイプは障害者が運営している、障害者のための芸術組織で、アーツアドミンはアーティストのための組織。私は完全にフリーランスの立場で関わっています。アンリミテッドはプログラムであって組織ではないので、建物や事務所を持っていないし、常勤雇用のスタッフもいません。維持するためのコストをあまりかけないで、柔軟に運営できるけれども、短期間しか機能しないと思っています。

もともと延長するのは 2013 年から 2016 年までの 3 年間という計画でした。それでも、とてもうまくいっていることと、アーツ・カウンシルがプログラムの成果を認めてくれたので、他の機関からも助成金が出て、150 万ポンドだったのが合計 300 万ポンド近くまで助成を受けられるようになりました。今ではアーツ・カウンシルから「やめないで、あと3年」と言われて、180 万ポンドが追加され、2020 年まで継続することが決定したのです。

今は2016年のプロジェクトから新しく2020年のプロジェクトへと移行している段階で、海外の組織と協働してプログラムを展開しようとしています。2012年の時点では海外との協力はできていましたが、今はできていません。2016年以降からのプロジェクトで海外用の助成金が出れば、日本とブラジル、オーストラリアから作品を出して展覧会等を開催したいと考えています。

今年6月から7月の約3週間、日本へ行って、東京、大阪、奈良、京都、広島、福岡を 訪問しました。日本では特に2つの点で感銘を受けました。まず一つは、ビジュアル・アー トの質が本当に高くて、英国はまだまだだと思いました。そしてもう一つは、それらの作品を使って商品化することがとても進んでいて、英国は見習うべきだと思ったんです^{注1}。 英国ではアートと商業との結びつきが弱い。財政難で福祉予算が縮小しているのでもっと探求すべきだと感じました。また、商品化などによって商業と結びつくと何がいいかというと、対象となる人が一気に増えることです。アンリミテッドの目的は、一般の人々の"障害"に対する認識や態度を変えることなので、多くの障害者を対象にすることはとても有効だと思いました。

▼審査委員会で作品を選ぶ基準はどのようなものですか?

――2012年向けも今も審査基準は同じで、とにかくいい作品、質の高い作品であることです。そして、作品を制作する上では障害者がリーダーであること。フォーマットはなんでもいいし、テーマも自由です。たとえば「障害をもつ人」あるいは「障害をもつこと」について研究するというテーマでもいいし、まったく障害に関係ないテーマのものもあります。「アンリミテッド」というプログラム名が示すとおり、運営側からアーティストに対して制作に関する指示は一切出しません。自分たちのつくりたいものをつくってもらい、作品制作をサポートすることのみに徹するプログラムなのです。

ただ、そうすると問題が起きます。なぜなら、何をもって"よいアート"とするかは人によって定義が異なるからです。審査委員会は様々な立場の人々から構成されていて、それぞれの判断に委ねています。私は今、シニア・プロデューサーになり、運営する側に回ったので、作品を選ぶという重責から解放されてホッとしています(笑)。2012年のときは委員の一人だったので選ぶことが仕事でした。運営する側の私たちは、委員の判断を尊重するし信じています。審査プロセスはとても重要なのです。もし、今の立場で私が選ぶとすれば、予算内で、かつ期限までに完成させることを優先して、リスクを負うことはできないので"よいアート"をつくるのとは逆になってしまうでしょう。私にとって"よいアート"というのは、リスクを伴い、かつ実験的であること、つまり"セーフティ"とは正反対のものです。

▼質の高い作品を選ぶための工夫は? どのような審査なのでしょうか?

一一従来の助成の仕組みとは違うようにしようと努めています。従来の仕組みというのは、たとえば申請の際に、「どのようにマネジメントをするのか」「どのように営業活動を行うのか」などに関する資料を大量に作成しなくてはいけません。自分の作品に関する説明よりも時間と労力を多くかけないといけないのです。そこで、アンリミテッドの申請書の最初の部分には、作品の理解につながるような説明を書いてもらうことにしました。写真や動画等の付属資料を付けることも可能です。

障害アーティストの場合は書類に記入することが苦手な人もいるので、申請書記入を支

援するための予算も別にあって、そういったサポートシステムも用意しています。

そうして提出された申請書を委員に読んでもらって、個々の作品のアイデアの部分を査 定していただきます。まだアイデア段階のものは、どうしてもつくらねばならないものか、 エキサイティングなものか等を判断してもらいます。

マーケティングやお金のマネジメントは誰かに教わればできるようになりますが、作品をつくること、とくに創造性の高い作品を生み出すことは誰かに教わってできるものではありません。すぐれた作品が生み出され、一般の人々の世界観を変えるようなことをめざしているので、そこを重視して選んでもらっています。

▼申請書の様式を見せていただけますか?

――今は申請期間を過ぎてしまったので、ホームページには掲載していないので、後日メール添付でお送りします (p.25 ~ 29 参照)。ただ、申請書の様式を改善する予定なので、あまり参考にはならないかもしれません。公募するたびにアンケートを行い、申請書の様式を改善する努力をしています。

前回(ラウンド 2:2015 年 5 月~2016 年 10 月のコミッション)は全部で209 件の申請があって、採択はわずか9件^{注2}のみでしたので、多くの人を傷つけてしまいました。ですから、可能なかぎりフィードバックできるようにしているし、採択されなかった人になるべく会うようにもしています。そうして話を聞いて、作品のアイデアが他の方法によって実現できるようにサポートしています。

▼その9件の採択というのは、最初からある程度の採択件数を決めていたのですか? それとも半数ぐらいに絞ってから話し合った結果ですか?

一次回からは審査のシステムを変える予定なので、前回までの方法と次回からの方法をお伝えします。前回までは委員全員が応募書類をすべて、つまり 209 件の申請書をすべて読んで「ロングリスト」をつくり、その中からみんなの意見をすり合わせていって「ショートリスト」を作成しました。ショートリストの段階で、演劇や音楽、文学といった分野ごとのバランスを見て、それぞれの分野から上位のものを選びます。その段階で約 40 作品になり、そこから委員全員で話し合って決めました。

次回からは申請書を 1 枚だけにする予定で、その 1 枚をまずアーティストに提出してもらいます。委員はそれを見て約 40 人の「ショートリスト」をつくり、そこで選ばれたアーティストに、詳細を記入したフルバージョンの申請書を提出してもらって、委員はそのフルバージョンの申請書を読んでさらに審査するという段階をふみます。そのように改善することで、応募する側も審査する側も時間を無駄にしないようにできると考えています。

また、申請書を出す前の段階でサージェリー(外科手術)という支援サービスを設けていて、障害アーティストにスタッフがスカイプ等で約20~30分間対応し、申請書作成

の相談にのっています。これまでは希望する人全員にサージェリーを行っていましたが、 次回からはショートリストに入る約 40 人が対象になります。

▼審査委員会の構成メンバーについて教えてください。

――アンリミテッドが対象にしている作品は障害アーティストによるものなので、選ぶ側 もそうあるべきだと考えて、約 15 席のうち半数以上は障害者で構成されています。

まず、助成金を拠出した機関にはそれぞれ1つの席が割り当てられます。4つのアーツ・カウンシル(アーツ・カウンシル・イングランド、クリエイティブ・スコットランド、アーツ・カウンシル・オブ・ノーザン・アイルランド、アーツ・カウンシル・オブ・ウェールズ)から1人ずつ、スピリット・オブ・2012からも1人、ブリティッシュ・カウンシルからも1人というふうにです。ただ、スコットランドとウェールズは、自分たちに審査する能力はないと言うので、インディペンデントの障害アーティストを自分たちの代表として出席してもらうようにしています。他に、2016年の会場になるサウスバンク・センター(ロンドン)とトラムウェイ(グラスゴー)からも1人ずつ、障害アーティストの組織であるダダフェスト(リバプール)からも1人の委員が出席します。

委員のうち5席はインディペンデントに割り当てられていて、その5席の候補者には、どうして自分が委員になるべきなのか、どのように関わりたいのかを説明してもらいます。 私が2012年に向けての審査委員会に加わったときも、そのようなプロセスを経ました。 独立した第三者が委員会に入って影響力をもつことはとても重要だと考えています。助成金を拠出した機関とは無関係ですけれども、このアンリミテッドを継続させたい、成功させたいという情熱をもっているに違いないからです。

それから、もし委員会メンバーたちの経験や知識不足によって、きちんと選べないかも しれないという懸念が生じた場合には、さらに外部の有識者からアドバイスをもらうこと もあります。その人たちに投票権はありませんが……前回は音楽と文学に関してアドバイ スをもらいました。

最初に組織した審査委員会で、これまで2回の審査を行いました。任期について特に規定はありませんが、次回からはおそらく新たなインディペンデント5人を選ぶと思います。ちなみに、インディペンデント5人(スコットランドとウェールズのアーツ・カウンシルの代表になっている2人を含む)には審査のために時間を費やしていただいているので、その分の謝金はお支払しています。

▼アンリミテッドのスタッフは何人いらっしゃいますか?

――シニア・プロデューサーである私以外に 4 人、うち 2 人はシェイプから、2 人はアーツアドミンからです。それから今、同席しているオリーは見習い、インターンとして関わっています。毎年 1 人、アーティストとして未だ自分の作品を発展させるところまでいかな

い人をインターンとして雇っています。予算や財務管理、マーケティング、PR等は、シェイプとアーツアドミンそれぞれに担当スタッフがいるので、彼らにお願いしています。

私たちの狙いとしては、文化セクターの様々な組織とパートナーを組むことが重要なので、その組織の人たちに仕事を任せています。たとえば演劇の組織が演劇フェスティバルを運営できるなら、私たちが運営ノウハウを学ぶことはせずに任せる。その理由は、①レガシー(遺産)という意味で、既存の文化セクターの組織が障害アーティストと協働していけるシステムをつくる、②予算はできるだけアーティストの作品制作に回すためです。実質約75%が採択されたアーティストに回っていて、こちらの運営費をかけないように努めています。

▼カルチュラル・オリンピアードはロンドン五輪の一環なので、ロンドン在住のアーティストだけを対象にしても良かったように思います。アンリミテッドは最初からロンドンだけでなく英国全体を対象にしていたのでしょうか? 英国全土に広げた理由は何でしょうか?

――最初から英国全体のアーティストを対象にすると決まっていました。障害をもったアーティストがプロとしてやっていくためには、悲しいけれど、未だにいろんな障害があります。だから、すばらしい作品を発掘するには母数を増やさないといけないのです。ベスト・アーティストが全員、ロンドンに住んでいるわけではなく、本当に素晴らしいアーティストを見つけるためには英国全体から探し出す必要があります。

また、もともとロンドンが五輪に立候補していた時点から、ロンドンだけではなく英国 全土を対象にすると宣言していたこともあります。

▼アンリミテッドの報告書はありますか?

一アンリミテッドはプログラムであって組織ではないので、報告書をつくる必要はないのです。ただし、過去数年間で進化しているので、その進捗を示す資料は多くあります。また、今日はこの後に第三者評価委員会(Independent evaluator)の会議があって、文化セクターに対してアンリミテッドがどれだけの貢献をしているか、評価結果を聞かせてもらう予定です。11 月にレポートができる予定で、2 段階に分かれていて、今日は1 段階目の評価結果です。できるだけ透明性を保ち、なるべく多くの人にオープンにしています。失敗したことも含め、そのプロセスもすべてオープンにしています。

また、半年に一回、関係している機関全員(助成金を出している4つのアーツ・カウンシル、ブリティッシュ・カウンシル、サウスバンク・センター、トラムウェイも)で、成果と課題を話し合う機会を設けています。

▼ありがとうございました。

(注釈)

1 ジョー・ヴェレント氏は大阪を訪れた際、アトリエコーナスを見学し、活動拠点となっている築 80 年の町屋と、利用者たちの創作活動が印象的だったことを綴っている。 http://www.unlimitedimpact.org.uk/asia-the-final-week/?source=image そして 2016 年夏から秋にかけて、英国の Pallant House Gallery でアトリエコーナスの所属作家 3 人(西岡弘治、大川誠、植野康幸)の展覧会が開催される運びとなった。 http://www.unlimitedimpact.org.uk/what-do-we-mean-by-unlimited-international/?-source=image

2 採択された9件は以下のとおり

'Demonstrating the World' Aaron Williamson (Visual Arts)

'The Doorways Project' Bekki Perriman (Other)

'TV Classics Part 1' Cameron Morgan (Visual Arts)

'The Way You Look (At Me) Tonight' Claire Cunningham (Dance)

'Grandad and the Machine' Jack Dean (Literature)

'Cosy' Kaite O'Reilly (Theatre)

'Assisted Suicide: The Musical' Liz Carr (Theatre)

'Cherophobia' Noemi Lakmaier (Visual Arts)

'Him' Sheila Hill (Theatre)

Editable Application form

This guide shows you what you will need to provide for our online application form. You can find the online application portal at http://apply.artsadmin.co.uk.

If you need any assistance completing your application contact Clara Giraud (clara@artsadmin.co.uk) at Artsadmin or call 020 7247 5102.

PAGE 1 Personal information

Lead artist/ organisation full name: *required

Contact first name: *required

Contact surname: *required

Contact email address: *required

Contact telephone: *required

Address: *required

Postcode: *required

Equal Opportunities monitoring information:

NB. This information will be detached from your application.

How would you describe your gender?

Your age:

Highest level of education completed

Do you consider yourself to be a disabled person:

How would you describe your ethnic origin?











PAGE 2 **Project details**

Project title: *required				
Producer name: *required				
Amount applied for: *required				
I confirm that the project is led by a disabled artist / company [] *required				
The primary artform of the project is: *required [] dance [] literature [] music [] theatre [] visual arts [] other				
I confirm that the applicant is based in: *required [] England [] Scotland [] Wales				
Introduction text (200 words): *required Please give a summary of the project in no more than 200 words. If successful, this will be used by Unlimited in marketing and communications.				
Project status *required Please choose one.				
[] The project has already undergone a Research and Development, and this activity only includes Creation & Production and Showcasing & Presentation				
[] The project has already undergone some Research and Development, and this activity includes more Research and Development, as well as Creation & Production and Showcasing & Presentation				
[] The project has not undergone any Research and Development, and this activity will include Research and Development, Creation & Production and Showcasing & Presentation				











PAGE 2 (continued) Project details

Project Proposal: *required

Please describe the work, its aims, form and content. Include why it is right for Unlimited, and whether it is adaptable to showcase in different venues/contexts. Please refer to the FAQ for more guidance on this section. 1000 words.

Project Details: Research & Development

Please only fill this in if you are including R&D in your activity. 500 words. Refer to the FAQ for more guidance on this section.

Project Details: Creation & Production *required

500 words. Refer to the FAQ for more guidance on this section.

Project Details: Showcasing & Presentation *required

500 words. Refer to the FAQ for more guidance on this section.

Project budget *required

Please upload your project budget. Download a budget template on our website. You may fill this in directly, or create your budget in another format using the same sections and headlines.

PAGE 3 Further info

Access *required

How are audience access requirements addressed? (200 words)

Mentoring *required

What kind of mentoring support would you like? (200 words)

PAGE 4 Supporting Material













Lead artist or company CV or biography (please upload) *required

Producer CV or biography (please upload) *required

Peer endorsement. *required

A letter of recommendation, and/or press coverage (please upload)

Website (URL):

Here you can add a link to your website or to the location of other documented work on-line.

Do you want to add images?

Add up to 10 images. Upload images one at a time. JPEG, PNG or GIF images only. Maximum file size 3MB. Larger image may take a while to upload.

Description (100 words for each image):

Please provide a short description of the content of your image for users who may be unable to access the material. If your media is password protected remember to include the password.

Do you want to add a video?

You can include a video up to six minutes in length as part of your application. Please be aware we will only watch the first six minutes of any longer videos.

Add video URL (Youtube or Vimeo)
OR upload via our uploader (maximum file size 50MB)

Video description (100 words):

Please provide a short description of the content of your video for users who may be unable to access the material. If your media is password protected remember to include the password.

Do you want to add audio?

Add audio URL (Soundcloud)











Audio description (100 words):

Please provide a short description of the content of your audio for users who may be unable to access the material. If your media is password protected remember to include the password.

Documents

You may upload one document featuring up to 6 examples of your work if it is text or document-based.

PAGE 5 Confirm and Submit

[] I understand that disabled artists can be the lead in 1 application, and mentioned in up to 2 others. $*$ required
[] I certify that I have read and agree to the application guidelines regarding this scheme and am eligible for the scheme, that the information submitted in this application is true and accurate to the best of my knowledge. *required
SUBMIT











■資料 5:アンリミテッド 参加アーティスト① インタビュー内容

調査日:2015年10月2日(金)

対応者:リチャード・ブッチン Richard Butchins 氏

(アーティスト, Producer, Director, Writer)

▼いつからアンリミテッドに参加したのですか?

――2012年ロンドン五輪の後、アンリミテッド・プログラムが継続することになり、新たな公募が始まったので申請したら、2014年の Research and Development awards に採択されたんです。自分は他のアーティストに比べると、障害者に対する認識の角度が違うと思う。方法としては、障害者のマインドとボディがどのように認識されているかを調べて分析するというもの。"213 things about me"という作品をつくり、エジンバラで行われたショーケースで発表しました。エジンバラでの展示は黒い布で覆われた部屋で、大きなスクリーンに作品を投影し、全体として体験型になるようなインスタレーションでした。作品に登場するのは自閉症の女性で、彼女は残念ながら自殺してしまいました。この映像作品をもとにして演劇作品をつくろうと考えています。

これまでつくってきた作品は、ユーモアがあったり少し軽めの作品もあるんですが、この映像作品はつくる必要性を強く感じて制作しました。

▼その女性は友人だったのですか?

――彼女とは、アメリカでサーカスをしている障害者のドキュメンタリー映画をつくっているときに出会ったんです。彼女は貧困家庭の出身で、いろいろな事情を抱えていました。アスペルガー障害をもっていて、スカイプで何度も話をしながら作品をつくっていきました。6千マイル離れた彼女とスカイプで話をすることができたのは良かった。

私は誰とでもコラボレーションしてみたいが、とくに自閉症の人には関心があります。 目に見えない障害なので周囲から理解されにくい状況に置かれているし、彼ら特有の世界 の見方があると感じているから。私自身、身体的に障害があって自閉傾向もあるんです。 パラリンピックではどうしても身体的な障害に注目されてしまいますが、"障害"はそれ だけではない、メンタルな部分にも注目する必要があると伝えていきたいですね。

▼アンリミテッド参加して良かったことや成果を教えてください。

――アンリミテッドは作品制作に関する指示は一切なく、アーティストが自由に表現できるプログラムなので、そこがいちばん良かったし、サポート・システムは非常によく機能していると思います。もう一つ、ここでは純粋にアーティストとして作品制作に没頭できるのが良かった。マスコミなどメインストリームの業界でも仕事をしていて、そこではプロデューサーとしての役割も担うことが多いので。アンリミテッドでは、アーティストは

質の高い作品を完成させることが重要であり、経済的な成果は求められません。

▼改善した方がいいと感じられたことや、課題はありますか?

一あくまでも個人的な意見ですが、「アンリミテッドは成功した」と称賛しすぎるのはやめた方がいいでしょう。まだまだ、やるべきことが多くあるから。ロンドンでは障害者の芸術とアクティビズムは密接な関係にあって、社会の中で"障害"をポジティブなものに変革していくことが重要です。障害者は同情されたり世話をされたりするだけの存在ではなく、社会にとって重要な存在だと認識してもらうには、オリンピック・パラリンピックのような大規模なイベントも必要ですが、その後に何を継続していくかが問われていると思います。幸いにして、アンリミテッドは継続しているし海外展開も行っているので、長期的に評価されるべきでしょう。

▼日本では2020年東京五輪に向けた文化プログラムにおいて、アンリミテッドのレガシーを継承することが決まっています。日本に対して何かアドバイスはありますか?

――日本は障害者の芸術だけでなく、アート全体で質の高い作品が生み出されているので 心配ないと思いますが、リオで展開されるアンリミテッド・プログラムから学んだ方がい いでしょう。

それから、サポート・ネットワークをつくってメンタリングのシステムを構築し、障害のあるアーティストを勇気づけ、オリジナリティあふれる意欲的な作品が生まれるように、とにかくチャンスを与えることでしょう。

アンリミテッドでは、それぞれのアーティストに「このプロデューサーと組んではどうか」と提案するシステムもある。日本で展開する場合、プロデュースできる人のリストをつくって、アーティストをしっかり支援していく体制をつくることも重要でしょう。ちなみにアンリミテッドは、プロデューサーへの謝金も含めて一つのプロジェクトとして助成してくれる。予算は申請書の中に書き込まないといけないので、予算を実際にどのように使うかをしっかり考える必要があります。新人の、これまで助成金をもらって作品制作をした経験のないアーティストは、予算にどういった種類の経費を含めるかをきっちり理解してもらうような仕組みも必要です。

アンリミテッドの場合、希望すれば申請書作成の相談にのってくれるシステムもあります。

▼ありがとうございました。

■資料 6:アンリミテッド 参加アーティスト② インタビュー内容

調査日:2015年10月2日(金)

対応者:シーラ・ヒル Sheila Hill 氏

(アーティスト, writer, theatre-maker, installation artist, curator)

▼いつからアンリミテッドに参加したのですか?

――2014年の Research and Development awards と、その後のラウンド 2 にも採択されました。私は 30 年前に脊髄のケガをして、最初の 3 年間はまったく歩けず、10 年間は病院にいました。ケガする前、私は作家でした。ケガの後に仕事を再開しましたが、障害者としてではありません。作家やアーティストとして、障害者というカテゴリーでは仕事をしたくなかったからです。周囲には障害や様々な問題を抱えながらも作品をつくっている人は大勢いますから。

ケガによって自分の作品は変化していません。(作品をつくるペースが)ゆっくりなだけ。でも、それは不幸中の幸いだったかもしれません。ゆっくりと時間をかけた方がシリアスな作品ができるから。友人のアーティストたちは 1 年間に $2 \sim 3$ 作品つくりますが、私は 5 年に 1 つぐらいですね。

ただし、今回は一つのプロジェクトとして、アンリミテッドにふさわしいと思ったので応募しました。加齢をテーマにした"Him"という作品で、登場する俳優はかつて兵士でした。20代のとき戦場へ赴き、誰かが彼の耳の真横で銃を撃ったために聞こえなくなりました。彼も障害者としてではなくアーティストとして活動しています。障害者であることを前面に出すと、作品を真剣に捉えてもらえないのではないかという心配や不安が常にあります。

アンリミテッドに申請する際、初めて「障害者のアーティストである」と連絡しました。 この経験はすごく自分にとって良かったと思っていますが、来年、作品を完成させて発表す るときに、障害者だからと特別扱いされるのではなく、一般の作品と同様に評価されたいと 願っています。

また、アンリミテッドに参加したことを契機に、様々な場所で作品を発表できる可能性が 広がったことはすごくうれしいけれど、参加アーティストが紹介されるときには「障害者の」 というのではなく、それぞれの作品について語られるべきだと思います。

少し話は変わりますが、私の息子(16歳)はミュージシャンで、左耳が聞こえません。 それは恥ずかしいことで人には知られたくないと彼は思っています。一緒にバンドを組んでいるメンバーにときどき、ビリーのいない所で「彼は左耳が聞こえないのよ」と言わなければいけないこともあって、すると「じつは私も……」と言いはじめる人もいます。聴覚に障害のあることを公表するとミュージシャンとしての仕事がなくなってしまうから秘密にして いるというんです。そういうふうに大きなジレンマを抱えながらアーティストとして仕事 をしている人は、わりと多いのではないでしょうか。

一つこれまでに他のプロジェクトで助成をもらったケースと比較しても、いい感じでサポートしてもらっています。ミーティングに行くと必ず「必要なものは?」「アクセスしたいことは?」と向こうから尋ねてくれます。それと、私は長時間、同じ姿勢で座れないので、そのことも配慮してくれるので助かります。今までアーティストとして海外に行けなかった理由は、飛行機に乗る場合は2~3席確保する必要があったから。アンリミテッドを通じて海外へ行く場合は、そのことを航空会社に説明してもらって行きやすくなりました。

ただ一つ疑問に感じるのは、アンリミテッドで作品を制作する場合、聴覚障害者や視覚障害者も鑑賞できるようにと言われることです。それはもちろん、聴覚障害者や視覚障害者のために必要だと思いますが、作品精度の点から考えると、そうしないといけないのは難しいこともあります。

プロデューサーを紹介してくれるシステムもありますが、私は作品制作も含め、すべて 自分でプロデュースしています。「プロデューサーを探した方がいい」と言いますが、そ れは制限がかかっているように感じるし、大きなジレンマですね。紹介してくれた複数の プロデューサーとミーティングをしてみましたが、自分には必要ないと思ったんです。ア ンリミテッドはすばらしいプログラムですが、完全だとは言えません。あくまでも個人的 意見ですが。

▼今回は 209 件の申請があって、9 件の採択だったそうですが、このことはどう思いますか?

――すごくよくないと思いました。2012年のカルチュラル・オリンピアードで展開されたアンリミテッドのレガシーとして UK 全土からアーティストを対象にすると言って期待値を上げるなら、もっと多くの人を採択すべきでしょう。あるいは、予算が限られているから想定される採択数はこの程度だと事前に伝えるべきだったのではないでしょうか。

- ▼日本では2020年東京五輪に向けた文化プログラムにおいて、アンリミテッドのレガシーを継承することが決まっています。日本に対して何かアドバイスはありますか?
- 一むずかしい質問ですね。私は一人のアーティストであり、答は持ち合わせていませんが、感じていることは、「障害アーティスト向けのもの」という名前をつけると、ある意味では有効ですが、別の見方をするとダメージが大きくなることもあるでしょう。障害者だけ特別という印象を与えてしまうのは、「そういうのは嫌だ」と感じる人もいると思い

ます。アンリミテッドは目的の一つとして、障害アーティストがメインストリームに加わっていけるようにすることを掲げていますが、カテゴライズすることで、逆にメインストリームからの距離を離してしまうこともあるでしょう。日本ではどのように障害アーティストを勇気づけ支援していくのかわかりませんが、逆効果が出ないようにすべきだと思います。

▼シーラさんは次回の公募には申請しますか?

一一申請しません。やはりメインストリームに戻りたい、障害アーティストと呼ばれると ころから元へ戻りたいんです。でも、このプログラムがあったからこそ、世界中のいろん な人に出会えたので、そのことはすごく感謝しています。素晴らしいプログラムであるこ とは間違いありません。

私自身が一つ危惧していることがあって、自分の作品 "Him" を来年発表する予定ですが、 大失敗に終わる場合もあります。そうなったら、これまでつながりができた人たちとの関係も終わってしまう恐れがあります。たぶん、そういう人たちは成功した作品にしか興味がないでしょうから……。

- ▼私はアーティストではありませんが、研究者としてこれまでに研究費を支援してもらってきました。大型のファンドだと、アイデアを実現するシステムがしっかり構築できていないと採択されません。そのことはたぶん同じですよね。
- ――そうですね。アンリミテッドの申請をしたときは、過去 20 年間の活動内容と、そのエビデンス資料もつけました。でも、新しい作品が成功するかどうかは大きな心配です。個々のプロジェクトごとにテーマも違うし、制作方法も違う。アーティストがみんな、口をそろえていうのは「失敗する自由がほしい」ということです。
- ▼アートとサイエンスはよく似ていて、ほとんどの新しいアイデアは失敗するものです。 でも、99% は失敗しても、残りの 1% は人類にとって普遍的価値があるものだという信頼 がある。だからサイエンス全体に支援しよう(公的助成金を出そう)という考えにつながっ ていくんです。
- ――なるほど。障害アーティストの成功率は 1% ぐらいなのかどうか調べてみたら面白いと思いますが、障害アーティストの中には「(健常者より) さらにもっといい作品をつくらないと認めてもらえない」と考えている人もいます。一般化はできないでしょうが、障害アーティストはどうしても作業量が少なく、作品制作の経験が少なくなりがちなので、そこがアーティストとして劣っているとみられてしまうのではないでしょうか。
- ▼障害アーティストが作品制作に多くの時間を要するなら、アンリミテッドはその時間を 短縮することのできるプログラムかもしれませんね。

――サイエンスとの比較の話を聞いて安心しました。99%失敗すると思うと、気が楽になります。

▼ 2020 年東京五輪はあくまで一つの通過点なので、そこで終わりにするのではなく、少なくとも 2030 年までのビジョンを描いて、継続できるような計画を盛り込んでおくべきだと考えています。その一つが障害アーティストをメインストリームへということなら、実現できるように様々な人々と協力していきたいと思います。ありがとうございました。

※参考:http://weareunlimited.org.uk/commission/sheila-hill-2/

■資料7:インクルーシブ・カフェ in 岡山

日 時:2015年10月10日(土)14:00~16:00

会 場:岡山県天神山文化プラザ 第3展示室 入口周辺

ゲスト: ※50音順、敬称略

加藤種男(公益社団法人企業メセナ協議会代表理事専務理事)

田野智子(NPO法人ハートアートリンク代表理事)

樋口龍二 (NPO 法人まる代表理事、株式会社ふくしごと代表取締役副社長)

松田圭一(NPO 法人灯心会スタッフ)

○司会 ただ今から「インクルーシブ・カフェ in 岡山」を開催させていただきます。最初 に少しだけ開催の経緯をご説明します。

このカフェは、文化庁が昨年度から実施している「戦略的芸術文化創造推進事業」を私どものNPOが2年連続で受託し、その一環として全国各地で開催しています。昨年度は熊本・横浜・高松・山形・可児の5カ所で開催し、高松での開催は高松市長にも登壇していただき、今日のゲストの田野さんとの対談も行いました。

さて、実はこの文化庁の事業は 2020 年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックとも関連があります。皆さんご存知かと思いますが、ここ数年のオリンピックはスポーツの祭典というだけではなく文化の祭典でもあり、文化プログラムを拡充していくことが求められています。その中で、近年、国内外で評価が高まってきた障害者の芸術表現活動に焦点を当てて、より一層盛り上げていこうという目標も掲げられています。

そういった状況をふまえて私どもは、2020年をゴールとするのではなく、一つのジャンピングボードと言いますか、皆さんの注目が高まっていることをチャンスととらえて、その後にもつなげていくような取り組みをしたい、少しカッコよく言いますと社会的包摂を実感できる社会をつくりたいと考えています。

そこで本日は、その社会的包摂を具現化していくヒントになるよう、様々な団体や企業、行政などと関係を築き、協働しながら社会に好循環をもたらしている方々をゲストとしてお招きしました。皆さんそれぞれ、ネットワーカーと言いますか、本当に多様な方々と連携して事業を展開しておられますので、その極意や秘訣をお聞きできるのではないかと楽しみにしております。

また、この岡山でのインクルーシブ・カフェが実現したのも、ハートアートリンク代表 理事の田野さんのおかげでして、展覧会と同時開催という素晴らしい設定をしていただき ました。では田野さん、よろしくお願いいたします。



○田野 皆さんこんにちは。田野でございます。本日は、 灯心会の松田圭一さんには「福祉施設でアートをすること」、福岡からお越しの NPO 法人まるの樋口龍二さんには「社会に output するデザインの取り組み」、そして私は「創造性と他者との関係性について」をテーマにプレゼンテーションしていき、加藤種男さんには、これらのテーマにそってコメントいただき、皆さんで意見を交換していきたいと考えております。

先に、今回の展示と会場についての説明をさせていただきます。この展示は、岡山県民文化祭地域フェスティバル「文化がまちに出る!地域いきいきプロジェクト in 備前」という企画に参加しており、その意味では、障害のある人の作品がまちにどんどん出ていき、作品を通してつながりができればというスタンスで展示しています。この「Sandwich展」は、入口にカフェコーナーもあります。でも実際には食べ物があるわけではなく(笑)、Sandwich展の意味は、会場奥の灯心会の個人を掘り下げていくようなアートの空間の展示、また手前の障害のある人の作品をもとにプロダクトデザインし、社会にアウトプットしていき気づかないまま自然に障害のある人の作品を日常に取り入れていく仕組みを創るデザイン展示。その間には、人と人との関係性をアートリンクで可視化していくという展示の3層構造の展示です。では先ほどの、灯心会の藤本隆美さんとパーカッショニストの岩本象一さんの演奏なども受けて、まず加藤さんから、感想を兼ねて自己紹介をお願いします。

○加藤 こんにちは。加藤と言います。私は、企業が集まって文化芸術とか、アートを支援していくという組織、企業メセナ協議会といいますが、そこで仕事をしています。例えば、2020年のオリンピックに向けて文化活動を促進するという活動をしています。実は、ほとんど毎週のように東京を離れていて、アートと社会の構造というものを結び付けることが仕事ですので、全国各地の現場へ出かけています。アートをアートの領域に閉じ込めるのではなく、他の要素と結び合うような状況をつくりたい。それには課題意識があって、地域社会をどうにかせにゃならんというのと、もう一つは、国際的に孤立している日本の

状況をどうにかせにゃならんと考えていて、それをどうやって解決していくか。そういう意味合いで、いろんな現場にお邪魔して、その現場におけるお話を伺って提言や提案をしております。

そんな立場で言うと、今日は作品も見せていただき、 演奏も最前列のかぶりつきで聴かせていただきました。 良かったです。何が良かったかというと、型にはめない こと。いかに型を崩していくか。要は、型にはめること



が世の中を駄目にする。後で、そのことの意味合いを考えていきたいと思います。今日の 演奏も、表現されているいろいろな表現も、ある状況、こうでしかならない状況を創り出 したいという思いにあふれていて、そういうところに共感いたしました。

○松田 NPO 法人灯心会の松田と申します。私は普段は、 灯心会という施設の中で展示や企画をさせていただいていますが、ほとんどは農業や内職の支援員をしています。前は、他の障害者施設で働いていて、たまたま灯心会の展覧会を見て衝撃を受けたんです。前の施設でもアートをしてはいましたが、こんな衝撃を受けたことはなかったんです。そこから、灯心会に通うようになって、今はここで仕事として関わっています。



今回の展示は、3人のアーティスト^{注1}さんのアトリエをそのままできるだけ忠実に再現させていただいています。普段は、他の人は作業をしていて、昼休みなどの空いた時間に創作していますが、この3人はほぼアトリエに居ます。なので、個性的な部屋、場所になっています。今までは作品展で絵を飾ることが多かったのですが、アトリエを再現するということはこれまでありませんでした。なので、どのように出そうか考えました。創作の現場というのは作品だけでなく、その過程で本人が集めてきたものや好きな本や、あるいは失敗した作品や、いろんな物がごちゃごちゃした空間で、それらをくるめてその人を出すことになるのではないかと、展示している途中で思いはじめていました。今日の藤本さんの演奏もそうですけれど、僕の思いとしては、出来上がった絵も面白いけれど、アーティスト自身が面白いと思うのです。今回の展示では、それを出すことができたかなと思います。ぜひ、普段の様子、アトリエや本人を見ていただければと思います。

○樋口 こんにちは。福祉事業所「工房まる」の運営をしている NPO 法人まるの樋口と申します。福岡が活動拠点なんですが、今朝は神戸でしゃべってから来ました。田野さんとは、90 年代後半からいろんな情報交換したり、プロジェクトで刺激し合ったりしてきました。

1997年に無認可作業所「工房まる」として活動を開始し、障害のある人と表現活動を仕事とする、表現活動で社会とのつながりを創ることをしてきて、2007年にNPO法人化しました。「工房まる」の施設運営と、対外的に社会と障害のある人、地域と施設を結ぶ「まるラボ」という新しい事業を立ち上げています。そんな感じでアートを媒体につながるとかコミットしたりと、実験的試み

をしています。私は福祉施設の経営者ではあるのですが、誰でも表現して豊かさを創造していくよう呼びかけをしています。だから、主語は人や地域です。僕は福祉施設職員ですが、一番興味があるのは、まちづくり、地域づくり。障害者が社会にコミットする地域づくりを目的に彼らの表現をアウトプットしたりしています。今日はその事例をお話しできればと思います。

▼一人ひとりの本意に沿える場所として

○田野では松田さん、施設でのアートについてお話しください。

○松田 NPO 法人灯心会は、岡山県北部の津山市と真庭市にあります。そこは B型の事業所です。以前作業所と言われていたところで、障害の人が毎日来て作業をして工賃を支払うという、何かしら作業をして働くところです。その中で農作業と内職、創作活動をしています。

その創作活動は、真庭市のスカイハートというところで行っています。正直、うちの施設は働くところで、絵ではお金にならないので、ほとんどの方が農業や内職で働いていて、昼休みや作業のないときに絵を描いているという方がほとんどです。好きなときに好きなだけ、したいように描く。その中で、定期的に作品展をしたり、岡山県展に出品したりしています。9年連続選ばれていて、それを見た人が自分も描いてみようと参加しています。灯心会で創作活動が始まったのは、理事長の障害の集える場所をつくりたいという思いでできた。それが作業所になって、今の就労支援B型へと移行してきたんです。移行していくときに、一般的には働く人の場所ということですが、働かなくても来られる場所にしたいと。『芸術新潮』の中にドイツの精神障害の人たちが共同生活をしながら創作活動をして自立しているという記事を見たときに、うちでもできないかなと思って始まったと聞いています。絵を描いて暮らすなんて、工賃も出せるなんて夢物語と思ったようですが、こうして展示をしていろんな人と関わっていくようになって変わってきたかなと思います。

これは、先ほど演奏した藤本さんですが、彼は20代の頃にスペインのグラナダでアート活動をしていて、統合失調症を患って日本に帰ってきた。今居るスカイハートはもともと学校だったところを借りて使っていますが、藤本さんはその教室をすべて絵で埋めつくしています。彼の空間を再現するのは難しかった。樹脂を使った作品や、墨汁やアクリル等いろんな材料を使っています。本人は、最初からこうしようと意図して始めるのではなく、とりあえずやってみようと動きながら制作しています。

神楽谷さんも精神の障害なんですが、自分が思ったことを形にしたい人で、PCのキーボードや物を見つけてくる。油絵も描けば、乾かす間にオブジェをつくったりと多種多様で面白いです。アトリエは敷き詰めたように絵を置いていって、どれが完成でどれが途中かが

わからないような感じ。

これは村瀬さんですね。この方が面白いのは、作業は続かないしほとんどの時間はアトリエで寝ていますが、時に起きて、一気に爆発的に作品を仕上げています。展示してあるダルマの絵をずっと描いていたことがあって、用意していた段ボール紙がなくなったため近くにあったカレンダーの裏にも描いていました。

私自身は福祉の現場に居て、アートの勉強はしてこなかったのですが、灯心会のこの人たちに出会って、のめり込んでしまって。他の施設なども見学しました。自分が心がけていることは、自由であることです。描くという自由と、何も描かない自由もあって良いと思う。画材もできるだけ用意して、その人の本意に添える場所でありたい。したいことをしたいようにできる、実験の場所。その中で、他の人の真似をしない、似たようなものが生まれてこない、自分がどうしたいかを確かめながら進めている中でいろんな作品が生まれてきている。それが灯心会の面白いところです。職員としては、作品が完成したらまず飾ろう、できたら人に見てもらおうと心がけて、作業場の壁にでも飾っています。そうすると普段絵を描かない人や、他の人に響いたりしています。実際に、福祉の中でアートをすることは難しかったり、お金にならなかったり、評価の対象にならなかったりします。私自身が面白いなと思ったことは、施設では仕事をする人が上に見られがちですが、ふと起きて描いた絵が売れたり評価されたりすると、その人の見方が変わってくるんですね。彼を見る目が変わっていったことが面白いなと思っています。施設でアートをすることでいろんな視点を持ち込めたり、外に発信して自分がいろんな人と関われたりすることが面白いと思っております。

○加藤 私の場合は、しゃべることが表現なのです。人間はともかく、いくつになっても、どういう状況におかれても何かがしたいけれども、その何かが見つかる人と見つからない人がいる。見つかる人は、こういう施設の中でやれる場合がある。けれども、ついに最後まで、絵も描きたくない音楽もやりたくない、何をやりたいのか自分でもよくわからないという人がいる。その人たちに何をしてもらうかを見つけ出すことが非常に難しい。それを見つけ出すのが、施設本来の役割かもしれない。壁に絵を描く、何かものを創る、音を出す、体を動かしたい、声を出したい、叫んでいたいという人間の発想は、これくらいしかないけれども、これじゃないことをやりたい人がいるかもしれない。それが我々にはわからない。どういうことをしたいのかを発見しようとするのが難しい。本当に素晴らしいのは、そういうのを一生懸命発見しようとしておられることで、これが素晴らしい。

厄介なのは、福祉施設とか医療、教育もそうですが、そこで働く人と、そこでサービスを受ける人との間にある権力関係ですね。法律用語で言うと、特別権力関係。つまり、そこに入れられている人や子ども、高齢者、障害者という人と、面倒を見なくちゃいけないと思っている側との間の力関係に大きな落差がある。だから虐待などが起きやすい。こう

した関係における暴力行為は、特に重大な犯罪とみなされるわけですね。ところが、子どもとか高齢者とか障害者が、本当に何をしたいのかを発見してあげるのではなく、一方的にこうしなきゃならんという方向にもっていきたがる。一方的に教える・教えられる関係にもっていこうとする。これは、ある意味では一方的な権力による犯罪だと言ってもいいくらいだけれど、そうしたがる。

兵庫県は老人ホームで博打をしてはいけないという条例を作ったと報じられています。 腹立たしい(笑)。何か理由はあるのだろうけれども。マージャンなんかやると賭博依存 症になるという。僕は、それを禁止するのはおかしいだろうと思うんですね。年寄りが何 をしようと自由にしてもらうべきだ。人々は何をしたがっているか、それを許容していく 社会というのが、あまりにもなさ過ぎる。そういう意味では、いろいろと頑張ってらっしゃ るのはわかるけど、さらにもっと我々は、すべての人が表現するチャンスを与えられるべ きだし、何をしたいのかを発見していく、その応援をしていくのが、我々の仕事のはずで すね。そういう意味では、まだまだやることはある。ほとんどの場合が逆行しているとい うか、全部芽を摘み取ろうというか、勝手に賭博依存症にしてお年寄りの楽しみを排除し ようとしている。しかもそれが正義としてまかり通っているのは非常に不思議だなと思っ ています。そういう意味で、あらゆることを許容していくべきです。

▼社会とのつなぎ方のデザイン

○田野 では、次にこういった福祉の現場にいる人と社会の人が出会うことをしている樋口さんに。

○樋口 私たちの法人では、時間・空間・仲間の3つの「間」を創っていこうとしています。 私たちは、障害というのは社会との中にあり、彼ら自身にあるのではないと提言していま す。まるのミッションは、「障害のある人たちが豊かな人間関係を持ち、その人らしい生 き方を選べる地域を創っていきたい」ということです。2007年にNPO法人化し、施設運 営としての「工房まる」と、対外的な事業としての「まるラボ」という2つの柱で活動し ています。

まずは「工房まる」の紹介をします。障害福祉サービス事業所です。3つのアトリエで、今47人の利用者がいます。介護を必要とする人、就労支援を中心とする人。「工房まる」の施設長はもともと写真を学んでいて、写真を通じてこの業界に入ってきたんです。絵を描いたり、木工をしたり、陶芸などの表現創作活動をしています。なぜそういうことをしているかというと、障害のある人は小さい頃から受動的に生活している傾向が強いと思うのです。生まれて生きていく中で、家族や医師、学校の先生とか、彼らの先を歩んで未来を創っていくという支援のあり方が主流であって。18歳を過ぎて我々の施設に来るんですが、いろんな経験をしていないという環境の障害が強いんですね。目が見えない、計算

ができない、コミュニケーションがとれない、日々の安定した心身状態がとれないとか、 そういうことが障害ではなくて、人と話したい、買い物をしたい、映画を見たいといった 欲求が生まれてはじめて障害が生じるのです。その間にある障害を克服していく環境に恵 まれずに、社会とまともにコミットできていない実状があると思う。私は、人生でドキド キ・ワクワクした経験がないということが障害だと思っていて。それはどうしてかという と、表現しちゃいけない人みたいな感覚があるんですね。「人に迷惑かける」とか「手が かかる」ということで、彼らはそれを繰り返してきた中で、表現することに対して弱気に なっている。コンプレックスを持っている。そういうことを僕は不快に思っていて、「い やいや、君たちも生きているかぎり表現する権利を持っていて、自分の人生を自分で選択 する権利があって。それは何も親が決めることではなくて」と思っています。個が尊重さ れれば、やりがいとか生きがいも見つかるし、失敗するとか、悔しがるとか。そういう感 覚は生きている中では非常に大切だと思っています。障害を持っているとそれもタブーと されてしまう世の中があって。だから、小さな工房ではありますが、表現を自由にやって いくことを大事にしています。今朝、神戸で福祉施設の方たちにお話ししたんですけれど も、その質問でもあったんですが、今は「障害者アート」という言葉がカテゴリー化されて、 世の中がちやほやしています。施設の中でアートをしているとか、アートをすると就労支 援につながるという動きがある中で、手を挙げて質問された方が「私の利用者さんに紙を 渡しても何も描いてくれないんですけれど」と。「じゃあやめた方がいいんではないでしょ うか?」と回答しました。「そういう人に無理に描かせないでくださいよ」と。アートを するということを目的にしないで、障害のある人と社会をどうつないでいくか、きっかけ なのだと。アートをうまく使うとか、アートというか表現ですよね。だからその感覚を大 切にしていってほしいと。そんな話を僕は常に各地でしています。

ちょっと絵を見てもらいますが、こんなふうにわかりやすい絵もありますが、知的に障害のある人の絵は抽象的に見えます。でも、これは彼らにとっては具象なんですよね。障害のある人が意図的に抽象画を描かない。何かを描こうとしていて、それが抽象的に見えるということであって。でも福祉施設の人は、「家だったらちゃんと屋根描いて玄関描いて、奥の方には木も描いて」とか言っちゃうわけですよ。それはもうアウトなわけで、こういう表現を認めてあげるということ。施設で表現をする上で大事な見守り方です。それは、彼らを信じているか、認めているか、そこでアート活動をやれる環境かどうかが決まっているという感じがすごくします。ピカソみたいな絵を描く人もいれば、絵は苦手な人もいて、陶芸や木工を創っています。なぜアート活動なのかは、そういうことです。僕らはアート活動をしようと思っていなくて、彼らと社会をつないでいく上では、彼らが表現をしないと始まらない。世の中には違っていて面白いという価値観があって、はみ出るとか枠を飛び越えるとか、既成概念を変えるとかいうところが評価されているのが彼らのアートだったということです。で、そういう作品をどのようにアウトプットしているか。実は、

私たちはギャラリーとか美術館ではあまり展示していません。一般の人の日常の生活の中にある美容室とかカフェですね。実際に利用者が出かけていける場に作品を展示し、人々と出会うきっかけをつくっています。地域の子どもとワークショップもしています。

次に「まるラボ」の方の紹介をします。行政からの受託事業ということで、セミナーとかイベントの開催をしたり、福岡市近郊の福祉施設の仕事を創造しています。これは某球団のロゴですが、実は誰も知らない(笑)。メディアが扱いきれない。福岡市内の福祉始業所に球団のグッズをつくるコンペしているんです。これは、福岡市の地下水の浄化施設に皆で絵を描いてもらって、我々がその工事のアピールをしている事例です。次は、アナゴが刺身で食えるという、客に手にとってもらえるパッケージの開発です。今までの水産加工物のイメージを一新するような。まずは、手にとって買ってもらえるようなパッケージ制作をまるに依頼されたんです。

○加藤 売れるのかな? (笑)

▼価値観の転換による仕事の創出

○樋口 名刺交換をして工場見学して、キャラクターもつくって。タレも。社長も盛り上がりました。7月5日ってアナゴの日なんですね。

一方、こちらは伝統工芸の博多織です。着物のニーズは減っていますが、なんとか残りたい、粋を残したい。で、大学の先生やデザイナーと一緒に、これまでの粋なデザインをゆるくしようと。風呂敷にして包む、結ぶ、つなぐをコンセプトに、手に職を持つ人にいろんな利用方法を提案いただいて、各地で展示販売しました。和の世界を表現して、1メートル四方の生地。伝統工芸は地元よりも東京や他の地域から注目されますね。

これは、福岡市文化芸術財団との障害者アート事業の仕事です。当初は世田谷美術館とか他の企画を持ってきて展示していましたが、地元の我々が2007年から委託され企画することとなりました。企画展名を「Life Map(ライフマップ)」に変更して、障害者の表現作品を通じて、観る側の人たちの価値観などを揺さぶって地図を広げてもらうことをコンセプトにいろんな企画を行いました。自閉症と言われる人のこだわりを作品にしたり、東日本大震災の被災地で行った、似顔絵を描く旅の報告とか。2014年からパフォーミングアーツにも取り組みました。健常者は出演しない公演ですね。脚本も出演も。2013年まで主に絵画作品を展示してきましたが、その人そのものが表現者という場を創りたくて始めました。福岡市美、福岡県美、アジア美術館の学芸員たちに、展示ワークショップをしてもらったら、美術好きの人もたくさん集まって、美術の展示のノウハウを学んだり展覧会ギャラリーでトークしたりしました。精神障害の人は社会の中では他の人とコミットしづらい現状があるので、こういう場づくり。精神障害を持つ人のユーモアを感じてもらえるよう、即興で4コマ漫画の公開制作をしてもらったり、ワークショップやったり。こう

いった形で、彼らの表現から様々なアウトプットを行ってきました。こんな私たちが平成 26年度に福岡県の文化賞を受賞いたしました。びっくりしました。評価いただいたことで、 またいろんなことができるのではないかと考えています。

○加藤 面白すぎる! お金にする仕方が上手というか、素晴らしい。普通の人たちが考えつかない、もともとデザインとしてあるものじゃないものをね。だからあの例のエンブレムも専門家がするから真似するわけでね(笑)。真似しようがないものを創れるというオリジナリティ、まさにクオリティが高い。これをクオリティと言わずに何というかと、発想を転換していく必要がある。今後我々が生きていくために、誰でもがオリジナリティが高いので、いちいち専門家にお尋ねしなくても、そういう人に来てもらわなくても、大丈夫やっていけるという状態を生み出して、それがさらに経済と結びついていく。お金は必要最小限あればいいんだけれど、多少お金になる仕組みは、誰かが考えないといけないのですね。それらも含めて素晴らしい。

▼アートリンクの誕生と広がり

○田野 では、関係性をテーマにした事例を発表します。私がこの活動を始めたのは95 年です。当時は阪神淡路震災で、ボランティアとか NPO という言葉が社会性を持ってき た頃です。その頃に、たんぽぽの家の播磨靖夫さんとトヨタ自動車社会貢献部が、「エイ ブルアート(可能性の芸術活動)」を提唱し、一方で、「TAM トヨタマネジメント講座」が 地域でフォーラムを展開し、岡山でも先駆的にアーティストたちが直島でワークショップ をしていました。同じ頃、岡山県の吉備高原にできた施設で、私は知的に障害のある人た ちの絵画講師を始めていました。ものすごい勢いで表現をする彼らのエネルギーに出会い、 作品展示や公募展に出品を行っていました。が、これは、一つの施設で完結できるもので はないと思っていましたし、当時若手のアーティストが大勢岡山に居ました。ということ もあり、とにかく社会に横のつながりをつくろうとしていたのが99年の頃でした。街中 で障害のある人たちも参加できるワークショップを行っているときに、あるアーティスト に「彼らの表現の裏にある日常とリンクしてみたい」と言われたのです。それが、アート リンク・プロジェクトのきっかけの一つです。今日は、そのアートリンクを中心にお話し するんですが、一人のアーティストが一人の障害のある人とペアになる。最近、アーティ ストインレジデンスとしてアーティストが地域に滞在して創作するという現場が増えてい ます。私の中では、アートリンクはアーティストが一人の障害の人に寄り添って一緒に創っ ていくという、人の存在がサイトスペシフィックと捉えています。

2004年から始め、いろんなジャンルの人たちが出会いました。例えば、この展示にも参加している伊丹宏太郎さんは自分の世界を漫画で描いていました。その相手になったアーティストは空間芸術を主に行っていたアーティストです。伊丹さんのオリジナルの

キャラクターを着ぐるみにして、街の中へ実際に着て出かけていき新しいストーリーを展 開していきました。また、今回の展示に参加しているアーティストの清水直人さんが最初 にペアになったのは、当時中学生の自閉症の長谷川さん。彼は言葉によるコミュニケーショ ンは苦手でしたが、コマ送りに描く絵の時間の刻み方がユニークと捉えた清水さんは、絵 だけの本エノホンを作り、それに書家や詩人たちが第3の表現者として発表していきまし た。最初は岡山市内のギャラリーなどで展示していましたが、その人らしさがよりわかる 場所で展示できないかと、後で話しますが、島や古民家など、より顔がつながりやすい場 所を求めて展開しています。その中で国際的なペアも生まれました。先ほどの伊丹さんと フロリダの画家デビットさん。彼らは互いに絵を描き足しては送り合いながら、作品を創っ ていきました。そのフロリダ州セントピーターズバーグ市は、高松市と姉妹都市なんです ね。そういう縁で、瀬戸内国際芸術祭の関連企画で、アートリンクを行うようになりました。 香川県高松市にも素晴らしい表現者がいるわけで、まさに彼らの表現を通して一人ひとり が表現者だということを見せてほしいと。同じように、一人のアーティストが一人の障害 のある人とペアになりました。上原さんと清水直人さんのウサギのバルーンですね。彼女 が描き続けているウサギの絵をモチーフにしています。「もう高校生なのだから他の絵も 描こう」と教師や親たちは促していましたが、清水さんは「いや、それが上原さんの表現だ」 とバルーンにします。この二人の思いが詰まったバルーンは、展示期間後もさまざまなフェ スティバル会場で膨らませています。

2013年の第2回目のときに、加藤種男さんと大西市長が会場で対談をしてくださり、「住んでいる人がみな自分が表現者だと思える都市こそが、寛容性のある成熟社会」と、改めてアートのもつ深遠な力を感じることができました。これらを受けて、3年おきのイベントとして行うのではなく、継続的にアーティストが福祉施設に出向き、日常的に表現活動ができる状況をつくる事業を行っています。現在2年目ですが、8施設に行っています。ここでもスタッフの方が喚起されていて、いろんな気づきや変化を教えてくれています。これを社会に向けて発表するために、高松市内の美術館や市役所ロビーで展示し、新しい人と出会う場を作っています。樋口さんも、「時間・空間・仲間」という3つの間をつくるとおっしゃいましたが、私も、「時間・空間・人間(ジンカン)」、social を福沢諭吉は人間(ジンカン)交際と訳したということを知り、この3つの間を作るために活動しています。その中で思うことは、人と人とのネットワークを機能させて自分たちだけのものにしない、このアートリンクもそれぞれの地域で誰かが真似してやってくれていいと。それこそが価値共創だと。そういう好循環が生まれればいいと思うんです。

ところで、2008年から「芸術と食の地産地賞」というプロジェクトをしました。岡山特産の桃の間引いたものでピクルスを作る。食をテーマにすると高齢者も障害者も活動の中に溶け込める。こうして隠岐の西ノ島にも出向き、島の人たちと協働で島ならではの魚のすり身のバーガー、島のスローなファストフード「スリーミーバーガー」を作ってきま

した。伝統の漁と新しい視点の融合ですね。

また、つい先週までは笠岡諸島の白石島・北木島に居たのですが、ここでアーティストが滞在して展示発表を行いました。いずれの作品も、我々の行うアーティストインレジデンスは、住んでいる人とリンクしながら創る。例えば、本日演奏してくださった岩本象ーさんは、北木島の基幹産業だった御影石を利用して楽器にしました。島の石工さんの協力を得て、彼らのプライドを喚起されていた。その孫たちが、岩本さんと一緒に石の楽器の演奏をしました。住んでいる人や関わっている人がムズムズするようなレジデンスをめざして、島で過ごしていただきました。

今回のこの展示空間は、社会の課題解決のデザインと、社会の課題を提起するアートというベクトルで言うと真逆の方向性の物に挟まれた sandwich 展です。個の中から湧き出る、むずむずダイナミズムな感覚、今日の皆さんの話の根底にある個性の尊重、そのベースには社会との関係性。これらをもう一度、この後の話につなげていけたらと考えています。

▼助けられる側から助ける側へ

○加藤 素晴らしいですね。私が田野さんと付き合いだして(笑)、一番感銘を受けたのは、障害者とアーティストが出会うと何か面白いものが生まれるという発想ですね。この発想がいい。それから、今日パーカッションをされた、岩本象一さんが北木島では、子どもたちとセッションして、石の島なので子どもたちが「石切りの唄」を唄ったりして、素晴らしかった。こういう活動の前提には、誰でもすべての人が表現者になる可能性があるということがある。本来は皆、自分は何者なのか、どういうことを考えているか、どう生きていきたいのかということを表現したがっている。ところが、その表現の手法がなかなか発明できない、発掘できずになんとなく生涯を送ってしまうわけです。特に障害を持っている場合とか、年取った場合とか難しいし。私は「絵を描け」なんて言われると、もっとも不愉快(笑)。絵なんか描いてなるもんかと思っている。

それはともあれ、これまで見てきた施設の中には、嫌と思っている人にこんな事やらしちゃダメだろうと、しみじみと思うことがありました。ともかく、お年寄りになろうが何しようが表現して生きていきたいということがある。それと、2020年のオリンピックで文化を盛んにするというのをどうやったら結び付けられるかということを今考えています。来年からオリンピックの文化プロジェクトが始まります。文化のプロジェクトはスポーツのプロジェクトと違う特色が2点あります。一つは来年から始まるということです。つまり2020年を待つことはない。もう一つは、東京以外にどこでやっても良いということです。全国津々浦々でやれるということ。誰もお金を出してくれるわけじゃないんだけれども、「やりましょうね」ということが呼びかけられている。そこで来年、こういうプロジェクトをやろうとしています。それは、演出家蜷川幸雄さんとの仕事です。最近は酸素

吸入しながら演出しておられる状態ですが、「ゴールドシアター」というのをやっておら れまして、お年寄りばかりで劇団創って芝居をやっているんですね。そこに目をつけて、 私は蜷川先生に妄想を語って、「来年それを、1万人の『ゴールドシアター』できないです かね」といったら、やるってことになったのです。1万人のお年寄り、出場資格65歳以 上。なんでそんなこと考えたかというと、私も出場可能のお年寄り仲間になったというの が一つの理由です。そのときに、どうやってやるんだろうと、どう演出するんだろうと考 えた。これは蜷川先生の遺作になるかもしれない(笑)。「演出しない演出をやってくださ い。」とお願いしました。野放し状態(笑)。そういうのをやろうというわけです。そのと きに、お金どうするかという問題が浮上したわけです。そこで、さいたま市が来年トリエ ンナーレをやりたいというので、ここに乗っけるのですが。埼玉県の側が一応お金を出し てくれるということになりました。しかし、1万人集めてやるとなったら2億円くらいか かると。とても県は2億円なんて出せない。そこでふと思いついたことはお年寄り、出場 者に一人1万円ずつ寄付してもらうと、計算上は1億円になるんです。これで結構賄える んじゃないかと考えて、寄付を一口1万から10口まで(笑)としているわけです。出場 すると、さらに金も出さなきゃいけない。そんなバカなこと誰がやるかと言われる。でも 私は絶対やると思っている。1万円くらいだったら出しても絶対やりたい。そこで、半分 の 5000 万だけプロジェクトに使って、半分の 5000 万は若い芸術家・アーティストの支 援のために使う基金にしたい。そのようにすることによって何を成し遂げたいかというと、 お年寄りが自ら表現をするけれども、それだけではない。これからの若い人の応援にまわ る。つまり今、福祉とか医療とかいろいろな問題で考えられているのは、それを受ける側 としてのお年寄りとか障害者と考えられている。そうじゃないんで、むしろ障害者やお年 寄りに我々が助けてもらう状態を作れればいいんじゃないか。だから、お年寄りが最後ま で世の中の役に立っているという状況を生み出す。皆の世話になってだけという状態から 脱却したい。だから、目的ある若い人のためにお金を出してください。どうせ、振り込め 詐欺でだまされて、お金持っていかれるでしょ(笑)。だから、目的のある人にお金を出 してください。若い人たちを応援する。それで、若い人たちは「おかげ様でこのように伸 びていますよ」と、年に1回とか2回とか発表会をやってもらって、そこに年寄りに集まっ てもらって、また1万円寄付してもらって(笑)。そういうことを考えているのです。お 年寄りがみんな若い人に、「君たち頑張っているね、もうちょっとこういうふうにやった らいいんじゃないか」と、感想を言う。年寄りが出しゃばる社会を創って、若い人に実質 的にプラスになるようなことをやっていければいいんじゃないかなと思っています。

先ほどからご紹介いただいている障害者のいろいろなプロジェクトの例を受けて、それをアートの活動自体でお金に変えようというのは、今の時代は非常に難しいと思います。 それをなんらかの形にして、一般の我々にとっていろんな考え方、物の見方、人生を考えていく上で、彼らの存在があることによって、彼らの表現を見ることによって、我々はこ

んなに潤った豊かな社会を生きることができるじゃないか。そのための対価を払うくらい だったらいいでしょという格好にしないかぎり難しいだろうなと思います。今や、普通の アートをいくらやってもお金にならない時代です。私は仕事柄、様々な芸術家の仕事を見 てきた。そこで拝見していると、確かに技術は高い。例えば若い頃に絵が上手だったから 画家になられた。そういう人の仕事を拝見していて、本当はもっと豊かな表現になれたじゃ ないかなと思うことがある。絵を描く規範やらルールやらが決められ、絵というものはこ ういうふうに描くものだと、ずっと教えられ続けてきて、本当にそう思い込んでしまった。 ちょっと外れた絵を描くと、それは違うと言われてきた。多くの芸術がそういう状態に陥っ ている。そこをとっぱらって、そうではない、どういう表現でもいいのだという状況を取 り戻すために、一つはアーティストの役割が生きてくる。アーティストにも、田野さんが やっておられるプロジェクトなどを通して、アーティストが自分のこれまでやってきた表 現が果たしていいのかと考え直すきっかけになるし、チャンスにもなる。そういう意味で、 こうした活動で、こうでしかないと思っていたことをどんどん変えていく。いろいろな可 能性があって良い。我々にだって予想がつかないようなことがこれから起きるかもしれな い。その方がはるかに価値がある。そういうことを含めて提案されているし、我々自身が そのことによって、結果的にすごく恩恵を受けることになると思っています。というよう に、社会構造をまったく変えていく。社会の在りようとか、人の感じ方とか、表現の仕方 を根本的に変えていかなくちゃいけない時代に来ていて、そのことが多分社会を本当の意 味で豊かにしていくし、我々が最期までぬり絵をやらずに生きていける(笑)というチャ ンスが生まれると思っている。そういう意味でぜひ、こうした活動を本当にいろいろと実 験をやり続けながら多様化していただきたい。

これしかないとだけは、ぜひしないでいただきたい。そういう意味で、エイブルアートとかアールブリュットとか先駆的な試みは非常に良かったと思う。つまり我々にこういう社会があることを、存在があることに目を向けさせたことは非常に良かった。けれども、一度出来上がると、アールブリュットとはこういうもの、エイブルアートとはこういうものとなりがちなので、さらにそれを打破して新しいものを創っていただけると良いと思います。ちょっと老人が興奮しました(笑)。

○樋口 ちょっと良いですか。先ほど紹介した「Life Map」のことですが、今やっているのは行政のお金なんですけど、ガンガン削られていく。でも継続してクオリティを上げていきたいんですね。で、クラウドファンディングというものを初めてやったのですが、応援したい人や活動したい人っているんです。うちの理事も、「高齢者ファンを増やせ」と言っている。高齢者にはこういう活動に協力したい人もいるし、彼らはお金も持っている。なので、そこにサービスを提供するみたいな流れを作って、自分たちがこれから構築していきたい。高齢になっても幸せでいられるというのを障害者福祉以外の人にもやっていけれ

ばいいと話しています。今、まるではシルバーの人を雇っていて、送迎をお願いしたりしています。そのシルバーの人の中には現役時代に2億円動かしてきた人もいて、彼らに営業を学んだりするとイキイキしてきて。引退したらゴルフばっかりしているというのではなくて、福祉施設とも関係していけばいいかなと。お話しを聞いてそういうことを思いました。

○田野 島では、子どもたちは島の宝で、年齢を超えたまなざしが通いやすい。障害や年齢に関わらず、一人ひとりの能力が生かされているのが見えるんです。祭りや伝統芸能でもそう。社会が忘れ去ってきたことが島の中には残っていて、その現場に遭遇するとハッとさせられる。島では死ぬまで元気でいようと助け合う地域社会だし。我々は教育で大衆になじむように育った方が効率的とされて、一人ひとりの顔が見えなくなっているのではないかな。

○樋口 ちょっと思い出したんだけれど。顔にぼかしが入るのは許せない。個人情報保護とかなんとか言うけれど、人間の尊厳は顔ですよね。メディアがそんなことを言うから。ちょっと怒ってしまうんです。

○田野 ここで樋口さんに、価値の転換の第一歩、まるの「落としボタン」の話を話していただきたいのですが。

▼社会にアウトプットすることの意味

○樋口「工房まる」はセンセーショナルでポップでお洒落でと思われていますが、本当にやりたいことはこんなことです。馬場さんのことです。重度の身体障害の彼はほとんど動けません。彼に対して一番大事にしているのはケアです。仕事ではなく。スタッフも余裕ができてきて、彼とモノをつくりたくなってきたんです。彼の日常を豊かにしたい。彼と表現したくなっちゃったんです。彼とできることをつくりたい。2005年の福岡美術館で展示したときに、当時18名の利用者すべての作品を展示したんです。その後、彼は表情が豊かで、しゃべれないけれども感性が豊かなので社会にアウトプットしたかった。彼につながること、モノづくりをしたかったんです。彼はテーブルにある物を落としていくのが好きで、動かしづらい手を伸ばして落とす。ガチャッと音がすると皆が振り向くのでニンマリ笑う。最初は陶芸の土を落としたものを積み上げてランタンを創ったんですが、ちょっと違うよなと思った。彼はランタン好きだったっけ?と。表現の目的を変えて、工房まるのボランティアの、あきさんと考えてもらった。ぽたっと落ちる土に穴をあけて、ボタンとし商品化したんです。ボランティアのあきさんも彼に問いかけ、コミュニケーションを交わしていって、彼のこれからの人生。親なきあとの人生。今のところ入所施設に行

くか従兄、兄弟が彼を引き取る。工房まるの活動も一瞬でできなくなる可能性もある。極力そうならないように、ボランティアにヘルプしてもらいました。彼と一緒に出かける。こうやって関わってできた商品であるということを付加価値として出していったんです。 実際、彼は工房まるを辞めて、彼の家族の介護の状況が生まれ、彼はまるから出ていった。表現というものが生活につながっていく。彼の今後につながっていくという事例でした。

○田野 その後があったんですね。プロセス、顔が見える商品。背景を想像していく展開というのが、まるの商品や Good Job! プロジェクトの商品にも感じられる。

○樋口 そうですね。

○田野 ではこの辺で、フロアからも発言していただければと思います。コーナスの白岩 さん、感想などいかがですか?

○白岩 こんにちは。大阪市でNPO法人コーナスとして活動しています。私たちの運営している施設は、重度と言われる知的障害者たちが通ってきています。1993年に無認可作業所としてスタートし、10年ぐらい下請け作業をしていましたが、「このままでは未来はない」と考え、根拠のない自信だけでアート活動を始めたら素晴らしい作品が次々に生まれ、今はヨーロッパの展覧会でも彼らの作品が展示されるようになりました。アートフェアにも出していただいて、思いがけないことが次々に起こっています。

今日はゲスト4人のお話を伺って共感できることがいっぱいでした。特に樋口さんがおっしゃっていた「彼らがアートをすることを目的にしてはいけない」ということ。彼らが自分の人生を充実させていく上でアートは大切ですが、それだけではありません。私どもはアートに特化している施設というよりも、彼らが生まれ育った地域でどういうふうに生きていくかをいつも考えていますし、生き方を見せていくためにアートはすごく伝えやすいツールなんだと思っています。そういう意味で、4人のお話はストンと私の中に入ってきました。社会の中で「共生」や「インクルージョン」を実現していくのは難しいこともあります。障害を持つ彼らを地域の人たちに受容してもらえるか、地域でどういうふうに活動していくか、ずうっともがきながらやってきましたし、これからも止まることも休むこともできないものです。コーナスの人たちの存在そのものをどれだけうまく伝えながら、受け入れていっていただくかを日々スタッフと考えています。今日のお話は今後のヒントにもなりました。ありがとうございました。

○田野 型にはめない、自由に生きていくというあたり、先日、灯心会ではモナリザの絵 を地域の子どもと一緒に描くということをされていましたね。 ○松田 あるとき考えついて、前に勤めていた施設や学校に灯心会の作品を持っていき、 出張美術館をしたんです。小学校の子どもと施設の人が一緒に何かをすることはほとんど なかったんですね。それで、絵を描くことを一緒にするだけなんですが、アートを通じて 自然な関わりができたんです。藤本さんも一緒に行ってもらって、彼が創作している様子 を小学校低学年の子どもたちが周りで見ていて、その状況は面白かった。灯心会としても 地域に出かけていくきっかけになるので、こういうのをもっとやっていきたいと考えてい ます。

▼市民自治による参画型社会を

○田野 型にはめない、自由に生きるという点で。加藤さん、創造列島の話に戻ってきました。一億総活躍、創造列島の1億総アーティスト。で、メインストリームにならないアートをやっている我々の将来はどうなるんでしょうかね? (笑)

○加藤 未来は明るいです! 今から 15 年くらい前、日本で NPO 法ができて、市民が自 ら集って、社会的課題に対して自分たちで取り組んで、どういう社会を作っていくかとい う気運が盛り上がった。市民自治あるいは市民社会、シビルソサエティの実現をめざそう という時代があったんですが、ほとんどそれが消えうせる状態にきている。それは、政治 的意味合いを超えて言うと、すべては俺が決めるという時代になって、あなた方はついて くればいいんだというような社会づくりをしようとしている。そこは我々に非常に大きな 課題を突き付けていて、市民自治というか社会を自ら創っていくという状態をもう一回取 り戻す必要があるんじゃないのかなと思います。自分がどのような生き方をするかは自分 で決める問題であって、それが誰かから活躍する場を与えられることをやっているかぎり は、障害者とか高齢者は永遠に置いてけぼりだ。今、女性の活躍なんて言っているけど、 あれは、いったん女性という枠をはめて、そこからちょっと頑張れる人は活躍の場を与え てあげようねという話であって、一度落としめて、そこから引き上げようとする、そうい う発想の社会。ともかく誰か偉い人に任せておけば社会はよくなるというか、誰かが決め て他はついていくというそういう時代になってしまったのは社会の課題だと思う。だから、 自由な表現というか、すべての人が表現者だと言える表現手法を開発、獲得し直さなけれ ばならないというふうに思っている。

皆さんは現場で、自治による社会を創っておられるなと思っています。だからそこには 可能性がある。そして若い人が自分たちの社会を自分たちで創っていこうという考えをも う一回復活しておられる方がいるのは、我々にとっても希望だ。でもそうじゃなくて、圧 倒的に人の言うことを聞いていれば世の中よくなるんだと、経済さえよくなれば、必ずや あなた方の生活はよくなるんだという話で突き進むのは非常に危うい。むしろ、我々が 我々自身の社会を自分たちで決めて創っていくことを復活させなくちゃならんというふうに思っているわけです。ともかく国家とか行政がすべてを主導していくシステムは何か間違っているんじゃないかと思う。やっぱり市民自治を復活させるのは非常に重要だ。そのことが2020年に向かって東京オピンリックで文化をやっていくときにも、国なり東京都なりがこういう方向でやるんだとか、組織委員会がこういう方向でやるということより以上に重要なのは、我々が何をやるかを我々が決めることですね。そういう意味で、新しい手法というか新しいやり方を開発していって皆で楽しめばいいんじゃないかな。お金はお年寄りからいただく(笑)。

○樋口 今日のキーワードですね。

○加藤 なぜお年寄りはお金を出すと私が思っているかというと、振り込め詐欺なんですよ。日本国民の平均的貯蓄力は高いんですね。多くのお年寄りはある程度の貯蓄力はある。で、何を求めているかというと、声をかけてくれることをすごく求めているんです。そりゃあ障害者も一緒なんで声をかけてほしいわけ。でも、声をかけてくれないわけ。孫や子どもが声をかけてくれりゃ、いつでも金出してやると思っているのにかけてくれないから、よその人が孫や子どもになりすまして来ると、「あっ、やっと声かけてくれた」と喜んで、「いくらいるんじゃ。1千万。その程度でいいんか」とだまされて出してしまう。これを阻止しなければならない。だから1万円くらい良いんじゃないのと、それが根拠なんです。それで、お年寄りに真の意味の生きがいを提供するには、お金も出してもらい、若い者をも応援する。

その中でプログラムとして可能性があるなと思っているのは、郷土芸能の復活です。新しいアートの表現も大事だけど。今回、東日本大震災の復興で我々が応援している中で発見したのは、あの土地にどれだけ多くの郷土芸能があるかということです。郷土芸能は自治性もすごく高いんだけれど、同時に排他性も高い。よそ者は入れない。でも、今みたいに少子高齢化で子どもがいなくなるとですね、そんなこと言っていられなくなった。だから I ターンとか U ターンを受け入れる。あるいは、よそ者が応援に来てくれるのを受け入れる状況ができてきた。これは非常に可能性がある。だから、新しい形の自治性は高いが排他性は低い復活をやればいい。もう一つは、郷土芸能のスターは誰かというと、実際踊ったりするのは若い人たちだけれど、それを指導するのはお年寄りです。もう一回、お年寄りの生きがいを提供する。先週行った、笠岡諸島の白石島の白石踊はすばらしい。子どもたちに「俺たちが踊りを教える」と日頃、家に籠っている人たちがイキイキしている。伝統的な郷土に残っているものと新しい表現を結びつけていくことを今回のオリンピックプロジェクトでもう一回発掘して、それぞれの地域でやってもらえると本当に良いなと思っています。

○樋口 ちょっと見てほしいものがあって、福岡市長が「ユニバーサル都市・福岡」と掲げているのですが、障害のある人も幸せになることがユニバーサル都市の実現につながるんだと思うのです。そこで映像を作りました。この中で、彼らの夢を語ってもらいました。彼らの思う夢を実現できたらいいなと思っています。

○田野 未来に向けて多様性を排除しない。私たちが関わっている障害のある人たちは、 会うごとに様々な表現で、我々が持っている多様性という概念さえもいとも簡単に打ち砕いてくれる。そんな彼らをリスペクトしながら関わっていきたいと思っています。少々時間は超過してしまいましたが、それぞれの立場から熱く語ることができたのではないかと思っています。最後に、本日のまとめを佐々木先生にお願いします。

○佐々木 皆さんこんにちは。このインクルーシブ・カフェを主催している NPO 都市文化創造機構の理事長の佐々木です。今日は田野さんに多大な協力をいただき、展覧会会場の近くで開催することができました。この場所は面白いですね。ロビーなのでいろんな音が入ってきて。また、1 時からのセッションも素晴らしかった。コンテンポラリーなジャズセッションというか、藤本さんと岩本さんに本物のインプロビ



藤本隆美さんと岩本象一さんのセッション

ゼーション(即興演奏)をやっていただいて、その後のトークセッションもそれぞれが自由に、多様性と寛容性がキーワードのような、ワクワクしながら面白く聴かせていただきました。

私は先週、障害者アートの先進事例調査のためにヨーロッパへ行っておりまして、ちょっと風邪をひいて声も出にくかったのですが、先ほどカフェでしょうが湯をいただき、やっと快復しました。カフェと sandwich 展の効果があったと思います。やっぱりアートっていうのは本物性が大事で、その障害のある人が生み出す本物性を我々が型にはまらない感受性で受け止めることができるかどうかが問われている。そういう柔らかい、感受性の高い社会でなければ 1 億総活躍にはならない。この言葉、実は訳を間違えたんでしょうね。今、ヨーロッパでは「full engagement society」という概念を使っていて、みんなが型にはまった雇用に就くというのではなく、一人ひとりが社会に多様に関わり合う、参画するという意味です。それなのに、なんとなく上から目線の訳になってしまった。

私は今、文化庁の仕事も手伝っています。成熟社会のほとんどの国では、文化関係の省

庁は予算も大きく、重要な仕事を担っています。ところが我が国は残念ながら、文化では相変わらず後進国なんですね。オリンピックでは、スタジアムやエンブレムに無駄に多額のお金を使うのではなく、障害者のアートも含めた多様な表現を支援できるように、柔らかい社会を実現する方向へできるだけ向けていこうと思っていまして、それが来年から始まる文化プログラムです。そして Unlimited (アンリミテッド)、これはイギリスのロンドンオリンピックのときに高く評価された障害者のアート活動支援プロジェクトです。これのレガシー(遺産)を継承することは決まっていますので、日本各地の現場から、草の根から広げるためのインクルーシブ・カフェをこれからも続けていきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

(注釈)

1 NPO 法人灯心会から sandwich 展に出展したのは、藤本隆美、村瀬貴彦、神楽谷の 3 人である (敬称略)。

<ゲストのプロフィール> *開催当時のもの、50音順、敬称略

◎加藤 種男(かとうたねお)

公益社団法人企業メセナ協議会代表理事専務理事

1990年よりアサヒ・アート・フェスティバル、アサヒビール大山崎山荘美術館の立ち上げなど、芸術文化活動に深く関与し、2012年より現職。25周年事業等を推進し、2020オリンピック・パラリンピックに向けた企業メセナの取り組み「創造列島」の展開を計画。アートNPOリンク理事、日本NPOセンター評議員、さいたまトリエンナーレ総合アドバイザー、アーツカウンシル東京カウンシルボード議長なども務める。2008年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

◎田野 智子(たのともこ)

NPO 法人ハートアートリンク 代表理事

2004年度よりアートリンク・プロジェクトを展開し、2007年からはフロリダ州セントピーターズバーグのNPOと「Artlink Japan」展やフォーラムを共同開催し、交流している。少子高齢化の進む瀬戸内海笠岡諸島での「カルチャーリンク」や高松市での障害福祉サービス事業所への芸術家派遣事業なども実施中。障がいの有無や年齢や分野を超えた人々の密接な交流から、一人ひとりが「かけがえのない存在」となることをめざしている。

◎樋口 龍二(ひぐちりゅうじ)

NPO 法人まる 代表理事、(株) ふくしごと 代表取締役副社長

1998 年、染色会社在職中に「工房まる」と出会い、魅了されて即転職。2007 年 NPO 法人設立時に代表理事就任。「エイブルアート・カンパニー」(奈良・東京・福岡・仙台)や「TSUNAGU FAMILY」(長崎)など、九州/福岡を中心に障害のある人たちの表現を社会にアウトプットする環境を構築中。2015 年 2 月には自立のサポートをめざし「ふくしごと」を地元企業やクリエーターたちと共同設立。既成概念を心地よく揺さぶり、多様な人の存在に柔軟に対応できる"まちづくり"として活動を行っている。

◎松田 圭一(まつだけいいち)

NPO 法人灯心会 スタッフ

愛媛大学教育学部卒業後、津山の障害者支援施設で10年間支援員として働く。作品展で出会った灯心会の作品に心を動かされ、アートの可能性を強く感じ、施設に通うようになって現在に至る。普段は内職や農業の作業支援を行いながら、灯心会のアーティストの創作活動の補助や作品展の企画などに携わっている。



会 場:岡山県天神山文化プラザ 第3展示室 入口周辺 (岡山市北区天神町8-54)

参加費:無料 参加申込み:不要(当日、直接会場へお越しください。)

お問合わせ: NPO法人都市文化創造機構 メール: inc1@ccn-j.net 電話: 090-6736-8174 (川井田)



■資料8:インクルーシブ・カフェ in 浜松

日 時:2015年12月3日(木)18:00~20:00

会 場:鴨江アートセンター301室

ゲスト:※50音順、敬称略

久保田翠(認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ理事長)

鈴木康友(浜松市長)

平田オリザ(劇作家・演出家・東京藝術大学特任教授)

モデレーター:佐々木雅幸 (NPO 法人都市文化創造機構理事長)

○司会 ただ今から「インクルーシブ・カフェ in 浜松」を開催させていただきます。最初 に少しだけ開催の経緯をご説明します。

このインクルーシブ・カフェは「障害者の芸術表現と社会的包摂」をキーワードにして、2年前から大阪で連続10回開催しました。その成果を踏まえて、文化庁が昨年度から実施している「戦略的芸術文化創造推進事業」に応募したところ、めでたく採択されて、昨年から全国各地で開催しています。

実は文化庁のこの事業は、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックとも関係があります。皆さんご存じかと思いますが、ここ数年のオリンピックはスポーツの祭典というだけではなく文化の祭典でもあり、文化プログラムを拡充していくことが求められています。そして、そのことと創造都市というものが実は密接に関係していて、「創造都市」とは「一人ひとりが創造的に活動することのできる都市」というふうに定義できます。

ここ浜松市は昨年 12 月に、ユネスコが推進している創造都市ネットワークに音楽分野で加盟されまして、加盟を記念して明日からは「世界創造都市フォーラム」が開催されます。

本日のゲストは、市民の創造的活動を支援されている浜松市の鈴木市長と、浜松市を拠点に先駆的活動をされている認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツの久保田さん、さらに文化芸術による社会的包摂というものを語る上では欠かせない平田オリザさんにもお越しいただきました。こういう魅力的なゲストをお招きしまして、浜松市が音楽の分野だけではなくて、あらゆる分野で取り組みを展開されて、一人ひとりがより創造的になっていけるようなヒントがたくさん話されるのではないかと思っております。

本日の流れは、まず3人のゲストの方々に15分ずつお話しいただいた後、少しブレークタイムを入れた後にディスカッションを行う予定ですので、最後までよろしくおつき合いください。

それでは早速、鈴木市長から浜松市の取り組みについてご紹介をお願いいたします。



▼創造都市・浜松の DNA

○鈴木 皆さん、こんばんは。浜松市の鈴木康友でございます。まず、「『創造都市・浜松』の推進」というテーマで浜松市の特徴などをお話しながら、「みんなのはままつ創造プロジェクト」という事業のご紹介もしていきたいと思います。

浜松市は平成 17年に周辺の 12市町村が合併をいたし

まして、今の大きな浜松市になりました。人口は約80万9千人、そのうち外国人が2万人ほどいらっしゃいます。リーマン・ショックの前はブラジル人だけで2万人ぐらいいた時期もございました。今、ブラジル人は7~8千人ぐらい、最近は中国やフィリピンなどアジアの方々が非常に増えています。

市の面積は 1,558km と、市町村の中では岐阜県高山市に次いで大きな面積です。高山市はほとんどが山ですので、人が住んでいる面積を比べると、浜松市が日本一になります。ちなみに 1,558km はどれぐらいかというと、伊豆半島全体が 1,421km ですから伊豆半島よりも大きいですね。佐賀県の面積と人口がほぼ同じで、県が一つできるという感じです。あらゆる自然、あらゆる産業、いろんな特徴が凝縮していますし、「産業のまち」「ものづくりのまち」として有名ですが、農業生産高は全国第 4 位で、農業のランキングの方が高い。農業、林業、水産業といった一次産業も大変盛んな都市でございます。

さらに浜松市は、市民の皆様の創造的な活動によって都市が活性化する、いわゆる創造都市をめざしていまして、世界の諸都市から注目されています。浜松にはもともと「やらまいか精神」というのがございます。これは「つべこべ考えずにやってみよう」という進取の気性を表していまして、そこからさまざまな産業が興りました。繊維産業や楽器産業、そしてオートバイや自動車などの輸送用機器産業、これらはすべて、浜松の町工場からスタートしています。たとえば、本田宗一郎さんが町工場のアート商会からスタートして、ホンダをつくり上げた。スズキさんもヤマハさんも町工場からスタートしておりまして、鈴木道雄さんや本田宗一郎さん、山葉寅楠さんなど先駆者たちの、まさに創造的活動と言っていいでしょうけれども、そこから産業が興ってきたんですね。浜松市はこうした先駆者たちのおかげで産業都市として発展してまいりました。

現在、日本には政令指定都市が20都市あり、そのうち15都市は県庁所在地です。県庁所在地というのは、一般的に人もお金も集まりやすく、都市が発展をする要素は自ずと備わっていると言えます。残りの5都市はどうかというと、私の分類でいきますと、うち3つは川崎市・堺市・相模原市で、東京や大阪という巨大都市の推進力によって大きくなった都市であり、県庁がなく、周りに都市の発展を牽引してくれるような大都市もないのに発展をしてきた都市は残りの2つしかありません。一つが北九州市で、もう一つが浜松市。

両者に共通しているのは産業都市だということであります。さらに、北九州市は明治時代に政府のつくった八幡製鉄所によって大きくなってきた都市という一面もあり、鉄の町として発展していきました。この浜松市はそうした官営ではございませんで、全部民の力で産業が興ってきた。そういう意味では、まさに産業面では創造都市であると言えると思います。そういう DNA を私たちは忘れてはいけません。もちろん産業も大事ですが、文化をはじめあらゆる分野で市民の皆さんが創造的な活動をすることによって、さらにこの都市を発展させていければと考えています。

▼ " やらまいか精神 " による市民活動の促進:「みんプロ」

○鈴木 今は「地方創生」と言われる時代でございます。人口減少の中、いかに地域がイキイキと輝いていくかという中で、浜松のこれまでの歩みを考えていくと、市民の皆さんの「やらまいか精神」による創造的活動によって活力を生み出していきたい。そのために市の施策としても位置づけておりまして、平成19年の第1次総合計画において、「市民協働で築く『未来へかがやく創造都市・浜松』」と都市の将来像を掲げました。

そうした中で、一つの大きな取り組みとして取り組んだのが、ユネスコの創造都市ネットワークへの加盟です。先ほど申しましたように、浜松市には楽器産業が集積しています。ヤマハさん、カワイさん、ローランドさんという、世界の3大楽器メーカーがすべて浜松に集積している。また、小さな楽器工房などもたくさんあり、まさにものづくりと楽器の町として発展をしてきました。その基盤を活用してさらに音楽文化を振興するため、ユネスコの創造都市ネットワークの音楽分野への加盟をめざして取り組みを続け、昨年めでたく承認されました。ちょうど今、浜松国際ピアノコンクールという3年に一度のビッグイベントが行われております。それに合わせて、明日からはネットワーク加盟記念として「世界創造都市フォーラム in 浜松 2015」を開催します。ユネスコ創造都市ネットワークの音楽分野での加盟都市の皆さんが浜松市に来てくださっています。

さて、浜松がめざす創造都市について、お配りした資料の中に5つの取り組みを書いてあります。「発進・交流・連携」「地域資源の活用」「創造産業の創出」「創造空間の演出」「市民活動の促進」ですね。市ではこの5つの方針に沿って、施策を推進しているところです。その中の「市民活動の促進」としてスタートしたのが「みんなのはままつ創造プロジェクト」という事業です。市民の皆様の活動に対して、そのスタートアップに100万円の補助金を出して応援していこうというもので、平成24年度以降、139件の事業を採択してまいりました。どの事業を採択するか、審査するための会議を設けていて、外部委員の皆様にも参加していただき、しっかり議論しています。審査のポイントは単なるイベントではなくて、都市の課題解決をめざすものであるか、あるいは文化と産業をつなげるものであるか、どういう価値観をもって事業を実施しようとしているか、そのあたりを見極めています。

この事業の愛称は「みんプロ」で、採択された事業は本当に多様です。先ほど申し上げたように、浜松市は都市部から長野県の県境、いわゆる中山間地域までを包含をしていますので、中山間地域の活性化から都市部の活性化までいろいろなテーマがございますし、アートから産業までいろいろな分野もございます。特に浜松市は多くの外国人が住んでいらっしゃいますので、そうした外国人や障害者を対象にした事業も社会的包摂の観点から大事なものとなっております。

「みんプロ」は、事業のスタートアップに最大 100 万円ずつを補助していますけれども、事業者には 1 年で終わりにするのではなく継続してほしいと考え、今年度から「ステップアップ部門」を設けました。活動団体の皆さんにも継続の努力をしていただきたいということで補助率を 50% にしています。最近は、たとえばクラウドファンディングの手法などで資金を集める団体さんも出てこられましたし、どうやって活動資金を集めるか、これも創造的な活動の一つではないかなと思いますね。

以上、簡単ではありますが、市民の皆さまの創造的な活動を応援している事例を紹介させていただきました。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。では次に久保田さん、よろしくお願いします。



▼福祉="間"のデザイン=クリエイティブな仕事 ○久保田 皆さま、こんばんは。認定 NPO 法人クリエイ ティブサポートレッツの久保田と申します。よろしくお 願いします。

私どもの活動は 2000 年から始まりました。私には障害のある息子がおりまして、障害のある子どもがいると、その母親も一緒にいろんなコミュニティからだんだん遠

くなっていくという現実にぶつかり、自分たちの子どもと私が幸せに過ごせる場所をつく ろうと、レッツを立ち上げました。それが 2000 年です。

ソーシャル・インクルージョンについて本格的に考え始めたのは 2006 年頃からで、障害のある人たちだけが幸せになるということはなくて、障害のある人もない人もともに過ごす中で実現していくものではないか、いろんな方々に彼らのことを知っていただかなければいけないということを思いました。そこでインクルージョン事業として、たとえば五島小学校と特別支援学校の交流事業などを実施してきました。2008 年には「たけし文化センター」という文化事業を行いました。たけしという、一人の重い障害の子どもを文化創造の軸とするというコンセプトで、旧文泉堂という本屋さんを会場にして6カ月間、浜松市の支援をいただきまして実験事業を行いました。

その後、ゆりの木通りで「たけし文化センターインフォラウンジ」という場所を約3年

間設けました。今は「黒板とキッチン」という名前になって運営者も替わっていますが、 そこの場所では、そこで誰かがやりたいことをひたすら支援するということをやりました。 皆さまもご存じかもしれませんが、ゆりの木通りの万年橋パークビルには非常にユニーク な社長さんがおりまして、その方のやりたいことを私たちが全力で応援するということを 3年間やったことによって、今ではさまざまなクリエーターやアーティストの方々が集積 していますので、少しはお手伝いができたかなと思っております。

2015年に認定 NPO 法人になりました。認定 NPO 法人は浜松市で2番目でした。少しお金のこともご説明しますと、年間事業費は約9,000万円。その中で福祉事業は80%、文化事業は20%です。文化事業はほぼ委託助成金で、福祉事業は国の法定施設として運営しておりますので、その収入が入っています。NPO 法人の正会員は30名、賛助会員は約200名、スタッフは私を入れて12名、パートが7名です。事業は大きく2つ、障害福祉事業と文化センター事業があります。それぞれ、障害福祉施設アルス・ノヴァと、のヴぁ公民館を運営していて、のヴぁ公民館は誰が利用してもいい場所で障害福祉施設ではありません。

アルス・ノヴァの事業は、少し専門的になりますが、5事業を展開しています。生活介護、自立訓練、就労移行、就労継続B型、放課後と、要するに大人から子どもまで毎日30人から40人の方々が通ってこられます。私どもの施設は珍しくて、障害の重い方々、精神系のあまい重度でない方々、発達障害の方々というように混在して来られております。

今、ご覧いただいている写真は、アルス・ノヴァの2階で音楽をやっているところです。 障害の重い方も軽い方も自己表現の一つとして、音楽というよりもパフォーマンスだと思 うんですが、こういうことを毎日やっております。

これは1階の様子です。見ていただくと、誰が障害者なのかわからないと思います。また、障害の重い人は誰で、軽い人は誰かというのもわからないと思います。こういう、いろんな方々が混在している場所を運営しております。私たちスタッフは、まず一人ひとりのやりたいことに沿うというところから始めるんですね。たとえば何にでもガムテープをぐるぐると貼ってしまう高橋舞さんという女性がいます。今日は彼女の作品を持ってきていますし、後ほど手にとってご覧ください。他に、言葉をあまり発せず、耳もあまり聞こえない男性がいて、私なら5秒で下りられるような階段を、20分も30分もかけて上り下りしています。彼の様子をスタッフがビデオに撮って、私たちがそのビデオを見たとき、彼の中に非常に豊かな時間が流れていることに気づきました。観察するといったら変ですけれども、じっと寄り添うことから大切なものが見えてくることを改めて気づかされました。

この写真は統合失調症の方で、見えてしまう幻覚や聞こえてしまう幻聴をすべて詩にして表現することをずっとやっていらっしゃったので、それを私たちはポエトリー・リーディングとして、イベントに仕立てていくというようなこともやっております。

この写真は「みんなのはままつ創造プロジェクト」に参加させていただいたときのもの

で、アルス・ノヴァで毎日行っているラジオ体操が、利用者それぞれの特長を浮き彫りに しているという気づきから、ラジオ体操の枠からはみ出してしまうような表現を舞台化す るプロジェクトとして「レディオ体操」を行いました。

「障害」の定義はいろいろ難しいのですが、私が感じている障害というのは"間(あいだ)"の問題だと思います。私とあなたの関係をどうやってつくっていくか、"間"の問題として捉えると、多様な間をつくっていけるように創造し、デザインするというのが障害福祉施設の仕事なのではないか。つまり福祉は、多様な関係性を創り出す、非常にクリエイティブな仕事だと考えています。

▼存在の肯定=生きるためのアート

○久保田 それから文化センター事業としての、のヴぁ公民館、たけし文化センターですが、これは障害福祉施設アルス・ノヴァから歩いて1分のところにあり、法人の100%自主運営でやっております。誰でも来ていいので、子どもたちが遊びに、あるいは宿題をしに来たり、ときには絵の講座があったり年配の方々が麻雀をしに来たり、先輩お母さんから後輩お母さんにお話をするというようなメニューがあったり、本当にさまざまです。

2014年からは「かたりのヴぁ」という事業を継続して行っていて、他人と対話することで異なる価値観を知るというようなことをやっています。相手を知る、特に言葉のない人たちも含めて、その存在を知るためにも、対話することの重要性をひしひしと感じています。職業も年齢も立場もまったく違う人たちが同じテーマで話し合うことを行っていて、その効果ははっきりしているわけではないんですが、人間というのは語ることによって考え方をはっきりさせるだけではなくて、むしろ迷うとか、弱くなることも同時に発生するんだと思います。ただ、そういったものに耐える力も必要ですし、そういったことをやっていかないと、本当の意味でのインクルージョン、わかりあえるというのは成立しない。ですので、対話は非常に大切なものだと思っております。

今年3月に「全国アートNPOフォーラム in 浜松」を開催しました。このフォーラムには鈴木市長に開会のご挨拶をいただきましたし、NHKの朝ドラ『あまちゃん』のオープニング曲で有名な大友良英さんにも来ていただいて、生きるためのアートについて語り合いました。

「ソーシャル・インクルージョン」というのも難しいですが、私自身は、さまざまな人たちの価値観や生き方を排除しないで受け入れていく、混ぜていく、多様であることを保障することではないかと思います。そして「文化・芸術・アート」とは、既存の価値観を揺るがす、揺さぶる、変える、疑う、対話する、そういったものではないかと思っています。たけし文化センターというのは、重度の障害をもった久保田壮がやりたいことをやり切る熱意を新たな文化創造の軸とするというコンセプトで始めまして、今の施設でも継続してやっています。一個人のやりたいこと、それが問題行動と言われるものであっても、ま

ず受け止めて、存在することを丸ごと肯定するようにしています。これは「生きるためのアート」だと私は思っているんですが、ここにいらっしゃる方はそうではないかもしれません。アートというと、なんとなくお金持ちの道楽というか、余剰だと思われる方が多いんですが、私にとってのアートは、まさに生きるためのアートでした。久保田壮というのは実は私の息子でして、重度の障害があって話すこともできないし、毎日、毎日、入れ物に石を入れて鳴らすという行動を24時間行うような人と一緒に生活をしたときに、その行為を否定するわけにいかなかった。なぜなら彼を全否定することにつながるからです。けれども学校では彼の石遊び的なものを取り上げて、他のことに意識が向かうようにしていました。でも先生たちの思い通りにはいかなくて、息子の行為をとにかく肯定して、そして次に何かを考えていくということが私にとってのアートでした。要するに、私の中のいろんな価値観を変えて、そのことによって私がよりよく生きようと思ったこと、それがまさしく切実な生きるためのアートだったんです。そして、私がそうであったように、苦しい状況にある人が明日も生きよう、よりよく生きようと思うこと、辛い状況を自分が生まれ変わるきっかけにしようと思うこと、そんなこともアートの力なのではないかと思っております。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムでは、障害のある人の文化・芸術活動に注目が集まると思います。日本では、アール・ブリュットイコール障害者アートだというふうに捉えられておりますが、そうではない。私はむしろ、作品ではなくて生き方に注目してほしい、生きるためのアートの存在というものも多くの方々に知っていただいて、次につなげていければと思っております。そして、この国の価値観を変えることができたら本当にいいなと。オリンピック・パラリンピックを契機に、この国の価値観を変えてくれるといいなと切実に思っております。

最後に、私たちが活動しているこの浜松市にソーシャル・インクルージョン・センターをつくりたい、障害のある人たちを核とした対話の場をつくりたいと思っています。多様な生き方、価値観、あり方、考え方を知り、触れ、学び、考え、対話する場が今、本当に必要だと思いますし、それを障害福祉施設ができるのではないかと思っております。皆様のご協力をお願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。では次に平田さん、お願いします。

▼アートによる都市再生の核となるもの

○平田 よろしくお願いいたします。私は劇作家・演出家で、作品をつくるのが一番の仕事です。浜松市あるいは静岡県でも何度も作品を上演させていただいてきましたが、他にも創造都市をめざす自治体のお手伝いや、障害者アートについてワークショップなども行ってまいりました。今日は社会的包摂について15分間でしゃべれという、相変わらず



の佐々木先生からの無茶ぶりで、大学院の入試問題みたいな難問ですが、せっかく浜松がユネスコの創造都市に認定もされましたので、そこを絡めながらお話をしたいと思います。

ここにいらっしゃる方はご存じのように、1980年代 以降、多くの欧米の都市が文化による都市の再生・復興 というものに取り組んでいます。日本の場合は、国道が あって、バイパスがあって、バイパス沿いに大型のショッ

ピングセンターができて、中心市街地がどんどん寂れていくという、どの町でも抱える問題があります。これは別に日本だけではなくて世界的な問題で、それに対抗するために文化による都市再生の挑戦が始まった。簡単に言いますと、欧米の多くの都市が80年代以降、弱者にやさしいまちづくりをしていく。たとえば車をシャットアウトしたり、大きな駐車場を市街地の外側につくってトラムを走らせたりする。ほぼ同時に、アートをツールとして使おうと、町の真ん中に大きなアートセンターをつくった。一番有名なのはフランスのナント市で、廃業したビスケット工場をアートセンターに改修しました。欧米の新しいアートセンターというのは多くの場合、社会的弱者が社会参加しやすい施設にしています。劇場はよく非日常の空間と言われますが、お化け屋敷のようなところが非日常の空間ではなくて、アートを通じて経済活動では出会わないはずの人たちを出会わせる。先ほど久保田さんから「対話」についてのお話もありましたが、要するに演劇を通じて外国人労働者とシングルマザーが出会う、あるいは美術を通じて高齢者と障害者が出会う、音楽を通じて子どもたちと性的少数者が出会うなど、そういう仕掛けをつくっていくことがアートによる都市再生の一つの大きなポイントなんじゃないかと思っています。

もっとも象徴的な例が、ヨーロッパの多くの美術館や音楽ホールなどで行われている「ホームレスプロジェクト」というものです。これはホームレスの方たちに、月に1回ぐらいシャワーを浴びていただいて、バザーで集めた服に着替えてもらって、コンサートや美術展に招待するというプロジェクトです。先進国のホームレスは、けっして生まれながらにホームレスだったわけではなくて、何かの理由で社会からドロップアウトした方たちです。もちろん経済的な理由が一番大きいわけですけれども、経済的な理由だけではホームレスにはならない、生活保護を受ければいいわけですから。ホームレスになる、路上生活者になるということはマインドの問題があるわけです。言うなれば世捨て人になってしまうということですから。そこでアートに触れることによって100人のうち3人でも5人でも、「そういえば子どもの頃は母親に連れられて音楽会に行ったな」とか、「うちのおやじは絵が好きだったな」ということを思い出して生きる気力や労働意欲を取り戻してもらえば、非常に安上がりなホームレス対策になるわけです。炊き出しをすると命は救えますが、根本的なホームレス対策にはならないわけですね。先進国のホームレスあるいは貧

困の問題というのは、必ず精神的問題が関わっているので、それを解決するにはアートが 非常に大きな役割を果たすと考えられています。

実際に日本でも、大阪市の西成区では元ホームレスの方たちが「むすび」という紙芝居劇団をつくって活動しています。ホームレスの方が生活保護を受けてもらうためには住所を定めないといけません。次に、無事にアパートを借りることができても、寂しさからお酒を飲み始めたりして、路上に戻ってしまう可能性も高くなります。そこで、何かの活動を入れていく。たとえば紙芝居。むすびの紙芝居は、一人で語る紙芝居ではなくて、何人かが登場人物に扮して登場する、みんなでやる紙芝居なんですね。そして老人ホームや保育所を回って公演する。本当に人間というのはおもしろいもので、何かやりがいがあったり、待ってくれている人がいると、生活のサイクルがきちんとしていくわけです。むすびのように、ホームレスの方たちがちゃんと定住していってくれるというような活動が日本でも始まってきています。

ただ、こういう事例はソーシャル・インクルージョン、社会的包摂を語る上でよく教科書的に語られるんですが、それだけを語っていると一般の方からは遠いイメージで、今までの福祉とあまり変わらない。要するに「アートを使った福祉活動ですね」ということで終わってしまいます。

▼真の社会的包摂とは

○平田 しかし、たとえばこういうことがあります。私は東京の駒場というところで小さな劇場を経営していて、7~8年前から雇用保険受給者、失業者の方に対して入場料の大幅な割引を行っています。これはヨーロッパの多くの劇場や美術館で行われているものです。ルーブル美術館などの受付には料金表が書いてありますね。正規の料金、団体割引、学生割引、それから高齢者割引、障害者割引、ここまでは日本でもあります。でもヨーロッパの場合、だいたい失業者割引というものがあるんです、日本ではこの施策をやっている自治体はまだないと思います。鈴木市長、ぜひお考えいただけるといいですね。

むしろ日本は、これまで逆の政策をしてきました。平日の昼間に雇用保険受給者、要するに失業者が劇場や映画館に来たら求職活動を怠っているということで保険料の支給をストップする。あるいは生活保護世帯の方が昼間にお芝居を見に来たら生活費の支給をストップする、そういう政策をしてきたんだと思います。ただ、これも百歩譲れば根拠があった。高度経済成長の時代だったなら、景気変動の波はあっても、半年も我慢すれば必ず再就職できた時代の雇用政策なんです。でも、今の問題は先が見えないということですよね。先進国の失職の問題というのは、これもマインドの問題です。職がまったくないわけではない、特に今は有効求人倍率がかなりよくなっていますから。でも、自分に合った職がない、自分に合った職を見つけるのが難しい。特に製造業の方が失職なさると、一番大変なのがコミュニケーション能力の問題だと言われています。コミュニケーション教育は私の

専門領域なんですけれども、私たち、だいたい50代より上の男性は子どもの頃に親から「男は自慢話をするもんじゃない」と言われて育てられてきているんですね。男は自慢話をするもんじゃないと育てておいて、「コミュニケーション能力がないと再就職できませんよ、自己アピールしてください」なんて、ひどい話です。人間はそう簡単には変われません。

皆さんも『フル・モンティ The Full Monty』という映画をご存じかと思うんですが、これはイギリスの鉄鋼業が衰退してしまった町を舞台にした作品です。鉄工所を解雇された男たちが、子どもにサッカーを見せたい、別れた奥さんを見返したいなど、いろいろな理由で男性ストリップを計画して、それを実現するまでの映画です。何が描かれている作品かというと、第二次産業の方たちが第三次産業に転換するということは、私みたいに根っからの第三次産業の人間には想像ができないほどに恥ずかしい。服を脱ぐのと同じぐらいに恥ずかしいこと、辛いことなんです。失業してもどこにでも再就職できるじゃないかと思われるかもしれませんが、なるべくコミュニケーション能力の必要のない職、たとえばガードマンや清掃員に限られてしまう。もちろん職業に貴賤はないわけですけれども、今までプライドを持って日本のものづくりを支えてきた製造業の方たちにとっては、とても辛いことで、その辛さや痛みの方が実は大きな問題なんだと思います。

失業した方は真面目にハローワークへ行かれます。しかし、なかなか自分に合った職業がない。そうすると、自分が社会に必要とされていないんじゃないかと感じて、だんだん引きこもりがちになってしまう。世の中の目も厳しい。「あそこのおじさん、会社に行ってないらしい」と言われて、どんどんどんどん閉じこもってしまう。今、中高年の男性の引きこもり、そして最終的に孤独死、孤立死というものが日本社会の抱える大きな問題になりつつあります。孤独死、孤立死は、社会全体にとっても大きなリスクとコストです。実際にそれが起こると部屋の臭いはひどいし、周りの人のショックも大きい、もうその部屋には誰も住まなくなりますし、周りの人さえ引っ越してしまう。孤独死が一回起こると、勝ち組であるような不動産所有者でさえも、個人では抱え切れないリスクとコストを負うということです。

そうだとすれば、私たちは考え方を変える必要があるんじゃないか。失業している方が 平日の昼間に劇場や音楽ホール、美術館に来てくれたら、「失業しているのに劇場に来て くれてありがとう」「生活保護を受けていて生活が大変なのに、劇場に来てくれてありが とう」と言える社会に変えていくべきではないか。これが本当の意味での社会的包摂なん じゃないかと思うわけです。

もちろん障害をもった方やホームレスの方たちを支援する、これはもう当然のことです。 しかし、それだけだと今までの福祉政策とそんなに区別がつかなくなってくる。本来はそ うではなくて、今まで目に見えなかった部分もアートによって包摂していくことが大事な んじゃないか。アートを通じて社会とつながっていてくれた方が、最終的に社会全体のリ スクもコストも軽減するということをはっきり認識させていかなくてはいけません。ただ 単にきれいごとで、かわいそうだから助けているのではなくて、一人ひとりが社会につながっていてくれた方が、最終的には社会全体のリスクもコストも軽減される。これは要するに強欲資本主義でもなく、福祉のばらまきでもない、新しい第三の選択なんだということをきちんと認識していく必要があるんじゃないかということです。

▼社会的包摂の実現は自分事で考えることから

○平田 僕は今、東京藝大の教員をやっているので、日本のトップを担う芸術家たちにホームレスや失業者、生活保護世帯など、いわゆる社会的弱者の話をします。僕は学生たちに、これは実は君たちの問題でもあるんだと話します。少し遠回りの話になりますけれども、たとえばヘイトスピーチというひどい現象があります。日本のヘイトスピーチの特徴は、在特会という団体の名前に象徴されるように、誰かが特権を持っていて、その人々だけが得をしているという非常に偏った正義感から生まれることが多いんですね。だからまったく罪悪感なく他者を罵倒するという現象が起きます。僕は、失業している人が昼間に劇場へ来たら後ろ指を差すような、あるいは生活保護世帯の人がお芝居や映画を見に行くことを非難するような精神も、実は同じところに根があると思います。

今の日本社会が抱える最大の問題は人口減少、少子化です。安倍政権はいろんな政策を打ち出しました。待機児童の解消や、女性が働きやすい環境をつくるなど、当然どれも大事です。でも、もう一つ大事なのは、子育て中の女性が子どもを預けて昼間に劇場に来ても、美術館で絵を楽しんでも、後ろ指を差されない社会をつくることだと思います。僕はそれも社会的包摂だと思うし、むしろそこまで含めること、たとえば女性が結婚して出産することによって、何かを犠牲にすることのない社会が包摂的な社会だと思うんです。

そうすると、社会的包摂は障害をもった方や失業者、ホームレスを対象にした問題ではなく、私たちすべての問題になってきますね。誰もが子どもを産む、あるいは子どもを育てる可能性があるわけですから。そのときに当然、アートを楽しむ権利も行使できなければならない。

たとえば今、先端的な企業では有給休暇の取得の促進をやっているんですけれども、ある企業では「エンタメ休暇」という名前をつけて取得するように奨励しています。要するに、自分を豊かにするため積極的に平日の昼間に休暇をとって、美術館などへ行きなさいと奨励している企業が出てきている。ブラック企業がはびこる一方で、そういう企業も出てきていて、その方が最終的に会社の利益が上がるという考え方です。

日本社会が直面している下り坂の、下りの傾斜を少しでもゆるくするためには、「社会的包摂」という考え方がもっとも重要な切り札になるのではないか。これまでお話ししたように自分にも関係のあることだと広く捉える、あるいは広く捉えるように社会に働きかけていくことが私たちの役割かなと思っております。どうもありがとうございました。(拍手)

▼多様性を育む創造拠点を

○司会 では、今から後半を始めさせていただきます。後半の進行はモデレーター役としまして、私ども NPO 法人都市文化創造機構理事長の佐々木が務めます。では、よろしくお願いします。



○佐々木 今日はクリエイティブサポートレッツの皆さんに会場設営やカフェの運営もしていただき、大変ユニークなインクルーシブ・カフェを開催できてうれしく思っています。会場をお借りしている鴨江アートセンターは1928年にできた建物で、耐震上の問題で一時は全面解体の方針が出されたんですが、久保田さんはじめ浜松市民が保存運動を起こした結果、2013年にこういう形で残ったそうです。浜松市民の運動の成果としての場所を選んでよかったなと思います。鈴木市長、いかがですか。

○鈴木 そうなんです。私が市長になる前に取り壊しが決まって、その予算もつきかけていたんですけれども、それはだめだと。建築士協会の皆さんや多くの皆さんから取り壊さないでほしいという話がありました。一方で、市内にはアート活動の拠点がないというのを前から聞いていたものですから、新しくそういう拠点をつくるよりも、ここの耐震工事をきちんとやって内部を改装し、アート活動の拠点にすればいいじゃないかということから、今のようなアートセンターになりました。いい残し方ができたかなと思っています。○佐々木 なるほど。創造都市にふさわしい創造拠点ができたということですね。ところで明日から、ユネスコの創造都市ネットワークに音楽分野で加盟している都市が集まって会議が開かれます。先ほどスタッフに伺うと、すでに加盟している9市のうち8市^{注1}と、新たに加盟をめざしている候補都市15市から7市が参加するということで、おそらく浜

松市が主催する国際会議の中では最大規模になるでしょうね。

○鈴木 そうですね。浜松市は UCLG (United Cities and Local Governments) という国際 的な自治体の連合組織に加盟をしておりまして、そのアジア太平洋支部の総会を 2010 年 に日本で初めて浜松市で開催しましたが、今回はそれ以上の規模になるかなと思います。

○佐々木 世界に羽ばたく創造都市として、音楽だけでなくさまざまなジャンルの市民の 創造活動を促進する取り組みを浜松市ではされています。そんな中で、先ほど久保田さん がソーシャル・インクルージョン・センターという場がほしいと話されました。もう少し 詳しく説明していただけますか。

○久保田 私は、行政につくってほしいとは考えていないんですね。障害福祉施設を運営していて思うのは、障害福祉という一つの項目だけをやるのはあまりにももったいないということ。それから、平田オリザさんのお話にもあったとおり、この国はやはり少子高齢化が進んでいますから、これから税収がどんどん少なくなって、人も少なくなっていくわけで、そうすると福祉サービスや、自分の幸せになるためのサービスを全部お金で買っていていいわけがない、持続できるわけがないと思います。幸せというのは一人ひとりの価値観によって違っていて、たとえば年収300万円で幸せになれる人もいれば、300万円では幸せになれない人もいる。そのとき、年収400万円の人が300万円の人をさげすむようなことをするから、おかしなことになるんだと思います。

そのためには、相手の価値観を尊重しつつ、自分の幸せを自分でつくっていくしかない。 私たちの世代は「こういう企業に入れば、あなたは一生安泰です」と言われて育ってきま したけれども、そんな終身雇用制を前提にした人生設計はもうできないわけで、それぞれ が自分の幸せを自分でつくっていかなければいけない。今の日本ではとても怖いことです が、そのときにキーワードになるというか、支えになるのが「多様性」なのではないでしょ うか。いろんな人の価値観を自分の中に取り込んで、自分はどういうふうに生きたいか、 どういうふうに生活したいかというのを真剣に考える、そういった場やプログラムが必要 だと思っていて、それをもしかしたら障害福祉施設がつくれるのではないかと。レッツは いろんな実験をさせていただいているので、できるんじゃないかなと思っています。

ただ、あまり人里離れたところでやるのももったいないので、ぜひ町中のどこかいい場所があったら貸してほしいんです。そして、そういうことを私たち障害福祉分野の関係者だけではなくて、高齢者の施設や病院など、いろんな機関の人々と連携していけば、この国はなんとかなるんじゃないかなと思っています。

○佐々木 わかりました。障害福祉施設も中心にはなるけれども、もっと広く他の市民グループと協力しながら、ということですね。先ほど鈴木市長からお話のあった「みんなのはままつ創造プロジェクト」に、レッツも採択されていますね。どうですか、このプロジェクトに参加した感想は。

○久保田 私は、市役所内に創造都市推進グループができたときに一番喜んだ市民だと思

います。なぜかと言えば、私たちが市役所の人と話をしようと思えば、話の内容によって障害保健福祉課や文化政策課、あるいは産業振興課というように、それぞれを訪ねていかなければいけなかったんだけれども、"創造都市"という一つのコンセプトによってそこに横串が刺せる。要するに創造都市の話をするということは、そこにいろんな課の人たちも参加していただけるというふうに期待したわけです。行政の中や議員の方々の中には「なんだかよくわからない」と言う方もおられるようですが、その「わからない」というところをもっと考えてほしいと思うんです。そこからじゃないと多様性は始まらないと思います。

▼ "偶然の出会い"や"能動性"を保障する場を

○佐々木 平田さん、お二人の話を聞かれていかがでしょう。

○平田 大ざっぱな質問ですね(笑)。何からお話ししましょうか……。本当にこの1年 ぐらい、人口減少問題をテーマにした自治体からの講演依頼がすごく多くなりました。人 口減少問題を劇作家に聞くなんて、もうこの国は終わりだろうと思うんですけれども(笑)。 日本の現状を簡単にお話すると、待機児童問題を抱えている自治体は約200、残りの1,400 の自治体には待機児童問題はなくて、逆に子どもがほしいんですね。やっぱり多くの少子 化対策は霞が関で考えられているものであって、地方ごとに抱えている課題は違います。 ほとんどの地方は非婚化・晩婚化の方が問題で、出会いがないと言われます。実際に結婚 なさっている世帯の出産数はまったく変わっていないか、むしろ増えている状況です。そ うすると問題は、町の中にこういうアートスペースやジャズ喫茶や古本屋など、偶然の出 会いの場がなくなっていることです。韓流ドラマでよくあるのは、本屋さんにいる見知ら ぬ男女が、何かの拍子で床に本が落ちて、拾おうとすると2人の手が当たってとか、背の 高い男性が女性のために本をとってあげるとか、そういうことからロマンスは始まるもの です。それなのに画廊や古本屋などを全部町の中からなくしていって、行政が慣れない婚 活パーティーをやっているというのが今の状況だと思うんですね。そういう出会いの場を つくっても、結婚するか、出産するかは本当に個人の自由なので、行政ができる対策はす ごく限られていると思います。だから、こういうアートスペースが増えれば、広い意味で 社会的包摂につながり、偶然の出会いの場を提供することにもなります。社会的包摂とい うのは従来型の福祉の概念で言うと、弱者救済の受け身の政策に見られてしまうんだけれ ども、もうこれしかない、日本に残された数少ない大事な政策の一つだといつも思います ね。

○佐々木 久保田さんが話された「生きるためのアート」と「あなたと私の間」という話にもつながってくるように感じますね。

○鈴木 そこが大事でして、一緒に何かの価値観を共有したり、一緒の目的意識をもって 活動したりすると、ものすごくカップルができるんですよ。僕は何回も選挙をやってきて いますが、これまでの選挙活動でもカップルになる例というのは山のようにあります。これはやはり同じ目的意識を持って一緒に活動して、そこに同志意識が芽生えるからです。だから、単にパーティーで出会って、少し話して、というようなお見合いパーティーはだめですね。そうではなく、一緒に活動するような場をいっぱいつくっていくことは、僕はとてもいい婚活の場にもなるんじゃないかなと、そんなふうに思いますね。

○久保田 多くの方はアートセンターというのは行政がやるものだと思われているかもしれませんが、私はそう思いませんし、私たちの運営している「のヴぁ公民館」は民設民営です。また、私の周囲には自分のおうちを開いて何かやってみたいと考えている方はわりと多くて、たとえば年配の方が「自分は歴史がすごく好きで子どもたちに教えたい」とか、「自分たちはまだ元気だから子どもたちの面倒を見てもいいよ」とか、「片親家庭の子が一人で御飯を食べなきゃいけないんだったら一緒に御飯を食べてもいいよ」とか、いろいろおっしゃいます。だけど、その人たちが実際に一歩を踏み出せないのは、事故があったらどうしよう、何か困ったことが起きたらどうしようという不安があるからなんです。

そういう思いをもった人たちがうまくつながっていければ前へ進むんでしょうが、具体的にどうすればいいかわからないんですけれども、とにかく怖がらずにやってみようと声はかけているので、「やらまいか精神」でやる方が増えていったらいいなと思います。

○鈴木 本当に行政がやると失敗することが多いでしょうね、たぶん。この建物ももし行政が運営すると、まず利用ルールなどの規定をいっぱいつくって、利用も予約制にする。それで、もし予約せずに来られると「あなたは予約をとっていないから利用できません」というような運営になってしまう。いろんな人に自由に使ってもらうためには、行政は場を設定しても、あまり運営には関わらない方がいいなと思います。昔は地域そのものが場になっていましたよね。実は私の両親は二人とも教員だったので夜にならないと帰ってこない。当時は放課後の児童クラブなどもありませんでしたが、居場所に困らなかった。友達の家に上がり込んで御飯まで食べさせてもらったり、そういうのが平気でできていたのでいい時代だったなと思いますし、僕はまさに地域の皆さんに育てていただいたなという感覚もあります。もう一度そういうことのできる社会になればいいんですが、それは自然に任せていてもなかなか実現できないので、久保田さんがおっしゃったように、いろんな方が自由に集まって、それぞれが楽しめるような、あまり規則で縛りつけない形のコミュニティがいっぱいできていけばいいなと、そんなふうに感じました。

▼市民の自助・自立による場の運営

○佐々木 確か、このアートセンターは静岡文化芸術大学の片山泰輔先生が代表理事を務めている一般社団法人浜松創造都市協議会が、指定管理者として運営されています。こういう施設の運営の点で、平田さんは多くの事例をご存じかと思いますが、いかがですか。

○平田 やっぱり思い浮かぶのは、創造都市の先駆である金沢市のことですね。今でこそ

21世紀美術館が注目されていますけれども、もともとは金沢市民芸術村という、地道だけれども非常にすばらしい活動があります。あそこは NPO に運営を任されていて、年中無休で 24 時間利用可能です。夜 10 時になるとほとんど職員は帰ってしまい、警備員が 1人だけ。当然、それは危険じゃないかという意見もあったわけですね。音楽のスタジオと美術のギャラリー、演劇の稽古場があって、防災施設なので大きな広場もあります。ある日の深夜、暴走族の子たちがやって来たときに、音楽のスタジオを使っていたパンク系バンドのお兄ちゃんたちが出て行って、「ここはお前らが来るところじゃない。来たかったら音楽をやりに来い」と言って施設を守ったんですよ。あそこはオープンして 20 年近くになると思いますが、器物の破損も一切ない。「自分たちの施設」という思いがあるから、使う人たちがものすごく大事に使うんです。要するに、市民の自助・自立に思い切って任せることが、逆に全体のコストとリスクを下げるということです。

それからもう一つ、やっぱり成功している事例は複合施設が多くなっています。青森県八戸市に「はっち」という、非常に注目を集めている施設がありまして、ここは観光振興と子育て支援なども行うし、ワークショップスペースもあって年間で約400のワークショップを実施しています。市の主催しているのが200、NPOで主催しているのが200。人口23万人の都市で来館者は100万人近いので、すごいにぎわいですね。高校生たちの居場所にもなっています。

今、高松市でもつくろうとしているのは、図書館の分室とデイケアサービス、子育て支援と市の出張所、それからワークショップスペースもある複合施設です。これは撤退したデパートのワンフロアを改修していまして、そういうのがあると家族で来て、たとえば認知症のおばあちゃんをデイケアに預けて、おじいちゃんは図書館で新聞を読んで、お母さんと子どもがワークショップを受けて、お父さんは商店街で買い物をして、ということができます。

「はっち」は開館1年で表通りの通行量が90%増、ほぼ倍になりました。それから、中心市街地の通行量が30%増になって、1年で23店舗、3年で50店舗の空き店舗が埋まったんです。このからくりは簡単で、要するにチェーン店のスターバックスやドトールなど、どこもまず通行量調査をしてから出店するので、通行量が上がると一気に出店し始め、そうなるとさらに通行量も増える。商店街はもともとポテンシャルのある場所のはずなのに、今までは大型のショッピングセンターと値引き競争、いわゆる経済で戦おうとしたので勝ち目がなかった。でも、何か一つ理由があれば家族で来てくれて、長い時間そこにいてくれる。その一つの理由が、たとえばアートを楽しめることかもしれないし、おばあちゃんを預けられることかもしれないし、安心して子どもが楽しめるところかもしれない。それは家族によって違うけれども、何か一つ理由があれば出かけるわけですから、今成功しているのは複合施設が多いですね。

○佐々木 平田さんが紹介された金沢市民芸術村は紡績工場を改修していて、レストラン

やカフェがあるんですね。この場も「インクルーシブ・カフェ」として、カフェも設営していますが、カフェがないとうまくない。なぜかというと対話が生まれるからです。やっぱり創造都市というのは、対話の生まれる場をうまく埋め込んでいく必要があります。久保田さんの考えておられるソーシャル・インクルージョン・センターもそうではないかと思うんですが、もう少し話してください。

▼文化多様性を都市の活力に

○久保田 浜松は音楽の町ということで、明日からユネスコの記念すべき会議があると思うんですが、できれば音楽を幅広く捉えていただきたいと思っています。最初のプレゼンで紹介したように、障害福祉施設の中で毎日音楽というか、即興演奏というか、一人ひとりが自由に楽しんで表現できる時間を設けることで、それが支援にもなっているし日常でもある。音楽は障害のとても重い方でも親しめるもので、これはパフォーマンスというか体で表現できる、すごくいい表現方法だなと思います。絵を描くことは筆や絵具を持たないとできない場合もあるんですが、音楽はもっと気軽に親しめる。そういう意味で、クラシックの楽器が演奏できる人だけが音楽を楽しめるということではないでしょうし、本当にいろんな音楽があっていいはずなんですね。

レッツでやっていることを、あまり近所に迷惑がかからないところで、どんどんやっていきたいと思っているし、そういう意味ではクラシックや技術に基づいた音楽ではない音楽というものを、もっとこの町が大切にしてくれるといいなと思っています。

- ○佐々木 市長、いかがですか。
- ○鈴木 クラシックだけが音楽じゃないというのは本当にそのとおりでございまして、音楽のよさというのはいろんな人が、障害をもった方も健常者も含めて、いろんな方がいろんな音楽の楽しみ方ができるというのがすばらしさだと思います。僕は合唱をやっていました。楽器は一つもできませんが、口さえあれば音楽を楽しめるという感じです。それに国籍も関係ないんですよね。浜松はこの20年ぐらいずっと、多文化共生の取り組みをやってきて、ブラジルのサンバがあったりボサノバがあったり、そういう音楽も浜松にはあります。国籍や障害の有無などを問わず、音楽というのは誰でも楽しめるすばらしいものですし、本当に隅々まで浸透していったときに初めて、やっぱり浜松は音楽の創造都市だと言えるようになるのではないかなと、そんなふうに思います。
- ○佐々木 ブラジルの話が出たんですけれども、明日からの会議はブラジルの都市も参加 するようですね。浜松市には自動車産業が好調であったときに、日系ブラジル人の方がた くさん来られて、その方々との共生も一つの大きな課題だったのではないでしょうか。
- ○鈴木 そうですね。生活習慣は違うし、言葉も通じない。たとえば日常生活のごみの出し方から理解してもらわないと近所迷惑になりますし、そういうところから始まって子どもたちの教育の問題など、ありとあらゆることが一緒に暮らしていく上で課題として出て

きました。

そういう課題を抱えたのは浜松だけではなくて他にもいくつかあったので、多文化共生に取り組んでいる都市で「外国人集住都市会議」をつくり、それぞれの取り組みを紹介し合って参考にしたり、あるいは国に対して様々な制度要求をしていきました。その要求の中からいくつか国を動かして制度を変えていったものもあります。今はむしろ浜松にいらっしゃるブラジルの方は、浜松で永住するという方がほとんどなんですね。ですから、そういう問題解決のレベルからどんどん変化してきて、いろんな文化の持つ多様性を都市の活力に生かしていくという、これはヨーロッパで注目されている「インターカルチュラル・シティ」という概念なんですけれども、多文化共生もそういう域に移ってきています。我々ももうそういう課題解決型の多文化共生という取り組みから、文化の多様性を都市のさまざまな取り組みに生かしていくという段階に移行していかねばならないというのが、最近の状況ですね。

▼一人ひとりをエンパワーするアート

○佐々木 今日は障害者の芸術表現の話もあったし、平田さんからはもっと広く包摂を捉えましょう、平日の昼間に子育て中の女性が劇場に来られるというようなことも包摂ですよというお話もありました。ブラジル人の方々が浜松市で永住されることは、文字どおり包摂ですね。そういう多様なレベルの包摂を浜松市はめざしていくと。ここまでのお話しを聞いて平田さん、いかがですか。

○平田 障害をもった方々の表現活動でいうと、やっぱり音楽はうらやましいですね。演劇は言葉を使うので一番大変なんですが、でも、障害をもった方が演劇のワークショップに参加すると本当に喜ばれます。ワークショップでは大抵、絶対に就けない職業の役を自分たちで設定するんですよ。車椅子のJリーガーや車椅子のスーパーモデルなど、僕が一番おもしろかったのは車椅子のハイジャック犯で、それは重度脳性マヒの19歳の男性が自分でつくった台本で、主役も自分でやりました。車椅子の人に対して、みんな親切にするじゃないですか、「アメいりますか」とか「水いりますか」とか「どうぞ、こちらの席に」とか言いますね。それで彼が「僕は飛行機が大好きなんで、コックピットを見せてもらえますか」と言ったら、「どうぞ、どうぞ」って中へ入れてハイジャックされてしまう。「俺たち障害者にそんな親切にして大丈夫か、あんたたち」と、すごいブラックユーモアでしょう。彼は今30歳ぐらいになっているので、もう10年以上お付き合いしていますが、彼の言っていることは1割程度しか僕にはわからない。介助の方でも3割ぐらいしかわからないので、パネルも使いながらコミュニケーションをとっています。

そういう意味で演劇というのは、特に海外で移民の多い国では多様性理解や多文化理解 に使われるケースがすごく多くて、カナダやオーストラリアではかなり盛んです。今の日 本で海外留学する高校生はオーストラリアやニュージーランドへ行くことが多く、帰国す ると一番おもしろかった授業は演劇だったという子がすごく多い。それがなぜなのか、日本の高校の先生方はわからない人が多かったんです。けっして英語をうまく話せるわけではないのに、なぜ演劇の授業が?と疑問に思う。でも、逆なんですね。向うでは演劇を使う技法がすごく発達していて、私たちの業界で言うところのおいしい役とか、おいしいせりふを用意しておいて、まだ英語が下手な子に「このせりふだけ言えば絶対受けるから」という役を割り振る。そうやって自信を持たせて社会に溶け込ませるというシステムとして、アート全体がうまく使われていて、特に演劇はよく使われています。僕がカナダで客員教授をやっていたときには新入生のオリエンテーションで、たとえばアジアから来た留学生がどんな犯罪に巻き込まれるかを劇で見せて、実際に留学生にロールプレイをしてもらうというように、非常にうまく使っていました。日本もこれからは当然そういう社会になっていかざるを得ないので、浜松が先進的にそうした取り組みをされれば、他の自治体にもすごくいい影響が与えられるんじゃないかなと思います。

○佐々木 まず留学生をエンパワーするために演劇を活用しているということですね。平田さんが最初に話されたように、ホームレスの方々に対しても経済的な支援だけではなく、精神面でも支援しないと同じ状態に戻ってしまう。つまりプライドや誇りというものをどうやって高めていくか。これは障害者の方々も同じだと思いますが、久保田さんが今までやってこられた実践と、これからつくりたいというソーシャル・インクルージョン・センターの中で、プライドを高めていく活動は具体的にどんなイメージをされていますか。

▼社会関係資本の蓄積を

○久保田 レッツのスタッフは今、私を入れて12人いますが、福祉分野出身の人は一人もいなくて、全員前職が違うんです。それぞれ、いろんな職業を経験して、たまたまうちに来て、とてもいい働きをしてくれています。そういう姿を見ていてつくづく思うのは、人は経済で動いてばかりいると不幸になるのではないか。自尊心みたいなものを回復していくことにおいては、やっぱりアートというか芸術活動は非常にいい効果をもたらすんですが、それをお金に換算し始めたときに、また自信がなくなっていく。それでどうやって食っていくんだとか、どうやって生きていくんだ、お金がどれだけ稼げるんだというふうになっていくと、その人自身の自分に対する評価も変わってしまいます。でも、今の若いスタッフを見ていると、そういうことに捉われない世代がすごく日本は増えたんじゃないかと。今はお金がどうのこうのではなくて、まず自分が何をしたいか、自分がどういう幸せを手に入れたいのかということを真剣に考えている若者が増えたように思います。

ただ、私もそうですが、私の世代から上あたりの人たちはお金に捉われ過ぎな感じがします。費用対効果なんて誰が決めたのと思いますし、特に人がプライドを回復していくということにおいて、お金なんか何の役にも立たないはずですよね。それよりも、わかってくれる你であるとか、友達がいるとか、そういうこと

の方に価値があるはずなんですけれども、それがどうしても数値化しないというか、見えてこない。だから、ソーシャル・インクルージョン・センターでは、そういうプログラムを障害のある人たちと一緒につくってみたいなと思います。

そして、私たちの活動の一つである「のヴぁてれび」、ここでカメラを持っているのは 実は障害のある人たちなんですね。彼らは障害者というふうに言われているけれども、で きることのたくさんある人たちが多いんです。ですから、それを仕事にする。仕事にする というのはイコールお金を稼ぐことだけではなく、生きがいだったり、自分ができること の表現だったりというふうに考えると、もっともっと人は生きやすくなるのではないかな と。そういうことを伝えるためのセンターをぜひ浜松からつくりたいと思っています。

○佐々木 私は久保田さんよりかなり上の世代で、高度経済成長の真っただ中で育ちましたが、価値というのは芸術の価値や社会的な信頼の価値というものもあり、これらの方が永遠ですよね。これまでの時代には繰り返しバブルが起きて、そしてバブルが崩壊していきますから金銭的価値ほど危ういものはない。そういうことがわかってくると、日本の社会はもう少し成熟すると思います。では最後に何か一言ずつ、お願いします。

○鈴木 お金に換算できない価値や数字で表せない価値というのは、実は行政もこれから 大事にしなくてはいけません。今、大事なキーワードとして出てきているのが「社会関係 資本」という、人と人とのつながりや地域のコミュニティがとても大事だというわけです。 特にこれからは人口が減っていくけれども実は戸数は増えていくんですね。つまり、それ だけ独り暮らしの人たちが増えていく、そういう時代になることが予測されていまして、 そうなると余計に人と人とのつながりやコミュニティ、いわゆる社会関係資本と言われる ものを我々は大事にしていかないといけません。お金に換算できない価値や数字で表せな い価値を大事にするということは、これまでとは違った手法も必要なので、これからの我々 の課題じゃないかなと思っております。

○久保田 来年ぐらいから少しずつでもソーシャル・インクルージョン・センターの構想をつくっていきたいと思います。そのためにもフォーラムや、インクルージョンのことについて考える場をいろいろ設けたいと思っていますので、ぜひ今日の参加者の中で興味のある方は来ていただきたいし、のヴぁ公民館はいつでも開いておりますので遊びに来ていただいて、皆さんと対話したいと思います。よろしくお願いします。

○平田 今、お金が尺度ではないというお話がありましたが、もう一つ、たぶん東京に近いことが尺度ではないということも大事だと思います。東京の文化に近いほどありがたいものだという感覚を、私たちは明治以降 140 年間持たされたというか持ち続けてきました。大人がそれを持っているから、子どもは東京へ出て行っちゃうわけで、自己肯定感というのは経済のことだけではありません。私がお手伝いしている兵庫県豊岡市の市長は、天才バカボンの「これでいいのだ」というのが口ぐせなんですけれども、要するに「ここでいいのだ」と。豊岡でいいのだ、浜松でいいのだ、浜松で生きていくんだということは、けっ

してネガティブなことではなくて、浜松が世界と直結していれば東京に出て行く必要はなくなるわけです。SPAC(静岡県舞台芸術センター)の芸術監督の宮城聡さんもよくおっしゃっているんですが、静岡から世界へ出て行って、世界から静岡へ来てくれるなら、若者たちは東京に行かなくなるだろうと。浜松ではそういう可能性が十分ある町なんだと思いますし、そこがやっぱり一番大事かなとお話を伺っていて思いました。

○佐々木 どうもありがとうございました。「創造都市・浜松」の近未来がかなり見えてきたように思います。明日と明後日の国際会議でも世界中からいろんな知恵が集まってくるので、多くの市民の方を含めて議論を続けていってほしいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 どうもありがとうございました。あっという間の2時間でしたが、大事なキーワードがたくさん出てきたと思います。本当にありがとうございました。もう一度、ゲストの皆さんに拍手をお願いいたします。(拍手)

最後に、レッツの皆さん、カフェといい、この会場設営といい、本当にありがとうございました。すてきなインクルーシブ・カフェになりました。ありがとうございました。(拍手)

(注釈)

1 浜松市を含む

<ゲストのプロフィール> *開催当時のもの、50音順、敬称略

◎久保田 翠(くぼたみどり)

認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ理事長

東京藝術大学大学院修了後、ランドスケープデザインの仕事に従事。長男の出産・子育てを機に、2000年クリエイティブサポートレッツ設立。2004年 NPO 法人化、2014年認定 NPO 法人化。2008年より個人を文化創造の拠点とする「たけし文化センター事業」をスタート。2010年通所型障害施設アルス・ノヴァ開設。2014年、誰もが利用できる私設公民館「のヴェ公民館」開所。

◎鈴木 康友 (すずきやすとも)

浜松市長

1980年3月慶應義塾大学法学部卒業、1985年3月財団法人松下政経塾卒業(第1期生)、1990年4月ステラプランニング代表取締役就任。2000年6月衆議院議員に初当選し2期務める(任期中、経済産業委員会理事)。2007年5月浜松市長に就任し、現在3期目。座右の銘は「至誠通天」(真心をもってすればいつかは認められるという意味)。

◎平田 オリザ (ひらたおりざ)

劇作家·演出家·東京藝術大学特任教授

1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2003年『その河をこえて、五月』(2002年日韓国民交流記念事業)で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。2002年度以降中学校の国語教科書で、2011年以降は小学校の国語教科書にも平田氏のワークショップの方法論に基づいた教材が採用され、多くの子どもたちが教室で演劇を創作する体験を行っている。



文化庁委託事業 平成27年度 戦略的芸術文化創造推進事業」



誰もが安心できる居場所づくりと表現活動を支援しているクリエイティブサポートレッ

誰もが安心できる思場所づくりと表現活動を支援しているソンエフィフィン・ハ ソの久保田さん。 2012年度から市民の 生活の資を高めようと、市民活動団体等が主導する創造的な 取り組みを応援するかんなのはままつ創造プロジェクハトを推進している診木市長。 芸術の役割を削して、父付の自己決定能力の必要性を説いが 新しい広場をつくる〕 (岩波書店)を著した平田さん。 「文化と社会色別「動造の場っくり」などをキーワードに三者三様の視点で語り合います。せびつき物人ださい。 Three guests talk together from their diverse perspectives about such key ideas as "Culture and Social Inclusion" and "Building Creative Spaces." We hope that you will attend and participate!

申込 問合先: NPO 法人都市文化創造機構 +-A inc2@con-j.net TEL 090-6736-8174 FAX 06-6474-3474

ute: Time: December 03; 2015; lish 660pm. ~ 8,00pm. ® Recognises eates at 5,50pm.

Venue: KAMOE ART CENTER Room361

Guots: Midsoth Kubbal (Cream-Support afe (NPO))

Yasuttomo Suzuki (Moyor of Hamanatus Chy)

Oriza Hiraki (Physright Sugramager Professor of Edya Vaironshy of the Ion)

日 時: 2015年12月3(k) 18:00~20:00 #間 17:30~
会 場: 戦江アーセンター301室
ケスト: 久保田 東北洋からよりエディジャル・レッツ書前)
で30 総合 東東東 2018年2月3日 ***
中田オリザ 前市 年 2018年2月4日 ***
・ 本子レーター: 佐木雅豊かり2月8日 ***
・ 本子レーター: 佐木雅田 ***
・ 本子レーター: 佐木雅田 ***
・ 本子レーター: 佐木雅田 ***
・ 本子レーター: 佐木雅田 ***
・ 本子レーター: 本子レーター:

Moderation Massayus, Sasada (Craibe City Consonting (NPO))

Presented by Agency for Cultural Affairs, Creative City Consortium (NPO)

Assisted by Hamamatsu City, Creative Support Lef (NPO),

Osaka City University Urban Research Plaza



エ III・X IE/T、NPU法人器市文化銀送機構 協 力: 浜松市、NPO法人クリエイティブサポートレッツ、大阪市立大学都市研究プラザ 主 催:文 化庁、NPO 法人都市文化創造機構







鴨江アートセンター 301室 浜松市中区鴨江町1番地 TEL.053-458-5360 [交通案内] ●承告が庁徒条10分 系総勢パスターミナル3番乗り場から約10分 (9番 物江・夜後センター行き 9.22番 搬江・投資センター大学合行き 地江アートセンターパス修下車)

②久保田 翠(くほたみどり) Midori Kubota (Director of the NPO 'Creative S

インクルーシブ・カフェとは、"韓害者の芸術表現"と"ソーシャル・インクルージョン"をテーマに話し合う場。 ーン・ハノLCは、阿舌百の云角表現 C ソーンヤル・1ノフルーション をアーマに訪 The Inclusive Café is a venue for discussion of the themes of 'Artistic Expression for the disabled people' and 'Social Inclusion.'

2013年5月から臨市研究ブラザが主催して大阪で計10個、2014年秋からは文化庁事業として臨市文化創造機構が全国各地で開催。

・	- 00 1000
ご氏名(ふりがな)、、「所属、ご連絡先(象を発力)	
シリックス に明点機構 メール inc2@ccn-Inet FAX 06-6474-3474	I nG9EIL
CHS	
ご連絡先	
	*インクルーシブ・カフェ in 項松 参加申込み方法 二氏名 (ふいがな) 、ご所属、ご連絡先 (電話番号かメールアドレス) をご記入の上、 →申込先: NPO法人略市文化創造機構 メール inc2@corrinet FAX 06-6474-3474 Δ1670 二氏名 二氏名



本報告書は、文化庁の委託事業としてNPO法人都市文化創造機構が実施した平成27年度 戦略的芸術文化創造推進事業(「障害者の芸術的表現活動による自己肯定感の高まりと多様な価値実現」推進事業)の成果をとりまとめたものです。本報告書の複製、転載、引用等に際しては、事前にNPO法人都市文化創造機構までご連絡ください。

メール: info@creative-city.net